



世田谷山観音寺の特攻平和観音  
(向って左が陸軍、右が海軍)



第137号

公益財団法人 特攻隊戦没者  
慰霊顕彰会  
編集人 金子敬志  
発行人 石井光政  
印刷所 島根印刷株式会社

目次

巻頭言	副理事長	岩崎 茂	2
第70回特攻平和観音年次法要	編集長	金子敬志	3
各地慰霊祭等参加報告			
三重縣護國神社への特攻勇士之像奉納	専務理事	石井光政	7
会員等投稿			
終戦時宰相・鈴木貫太郎大将を偲んで	理事	鮎田英一	8
2017多田野語録	会員	多田野弘	17
築城基地開設五十年史より(其の五)	会員	水町勝博	18
	会員	水町勝博	22
	会員	中溝二郎	26
海上挺進第28戦隊及び基地第28大隊	会員	中溝二郎	28
海上挺進第29戦隊及び基地第29大隊	会員	中溝二郎	30
海上挺進第30戦隊及び基地第30大隊	第30戦隊長	富田 稔	31
海上挺進第30戦隊の記録	会員	中溝二郎	37
外地に於ける海上挺進隊	会員	中溝二郎	41
本土作戦準備計画と海上挺進戦隊	会員	中溝二郎	46
万朶隊隊員の遺稿・遺書	会員	大新田納	47
情報提供のお願い(春日隊隊員について)	事務局	事務局	48
顕彰譜(4)	会員	池田康博	53
連載 山ある記16	会員	池田康博	54
芸欄 歌俳柳の広場			
短歌・俳句・川柳			
事務局からの報告等			
住所等の変更について			
年会費及び寄付金の税額控除			
寄付者等の報告			
挿絵提供	空自OB	宇山氏	55

「巻頭言」  
公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

副理事長 岩崎 茂



我が国では、長い長いコロナ禍での生活が、もうじき二年になるうとしています。今年、春先から始まったワクチン接種も徐々に進み、既に日本国民の約6割が二回目の接種を終えており、10月1日からは、全ての地域での「緊急事態宣言」や「蔓延防止等重点措置」が解除され、新型コロナウイルスに関する行動制限がない状態となっています。しかし、我々が新型コロナウイルス・ウイルスを駆除し撃滅させた訳でもなく、このウイルスに感染しない新薬を開発した訳でもありません。まだ、まだこの新型コロナウイルス・ウイルスに感染する可能性があります。この為、政府は9月末に「新型コロナウイルス基本的対処方針」を发出し、今後、これまでどおりの対策（マスク着用、手洗い、三密回

避等）を継続する様、国民に注意喚起をしています。

この様なことから、今年も残念ながら、昨年に引き続き各地での特攻隊戦没者に関する慰霊祭や各種慰霊行事等が中止となったり、規模が縮小されたりしています。過日、毎年恒例の世田谷山観音寺での「特攻平和観音年次法要」も規模を大幅に縮小し、特攻隊戦没者慰霊顕彰会（以降「顕彰会」）の役員のみで行いました。

この様な二年に及ぶ全国での慰霊行事の中止等を受け、私が危惧しています。これは、果して来年以降の慰霊祭にどれだけの方々がご参集して頂けるかです。私は、自衛官勤務を終了した後「顕彰会」に参加させて頂きましたので、「顕彰会」での活動は、まだ7年の経験しかなく、必ずしも「顕彰会」の事や各地での慰霊行事を周知している訳ではありません。しかし、最近の傾向を見ますと、新型コロナウイルス・ウイルス以前であっても、各地での慰霊行事への参加者数は減少してきています。そして、今回のコロナ騒動の後には、更に減少するのではと心配をしています。各地の慰霊行事のみならず、我が「顕彰会」の会員数も激減の一途です。かつては、3000名を超す会員数でしたが、毎年一定数の新規加入者がおられますが、結果的には、退会される方が遙か

に多く、結果的には、毎年100名程度の減少となっています。

私は、「顕彰会」の副理事長の職を拝命し、「顕彰会」の機関紙であります「特攻」の編集委員長でもあります。この会員数の減少や各地での慰霊行事に対する参加される方の減少に歯止めをかけるため、機関紙「特攻」組み立てを工夫し、編集内容・要領を変える等の努力を行っていらっしゃいます。また、「顕彰会」としては、最近のSNSの普及等を考慮し、若い方々のご意見を取り入れ会員でない方々にも気軽に「顕彰会」の現状等が見れるようにホームページの充実等を図っているところです。会員の中には、この様な変更等を必ずしも「よし」としない方もおられるかもしれませんが、何卒、私達、「顕彰会」の大きな目的である「特攻隊員の思いを次世代に伝える」ことを考えれば、私どもは、考えられるあらゆる努力をしなければと努力を傾注中です。「顕彰会」の会員であるか否かに拘わらず、何かより良いお知恵があれば、「顕彰会」事務局にご一報くださいますようお願い申し上げます。最後に「顕彰会」の活動は、会員の全員で行っていくべきものと考えております。今後とも皆様方の積極的な活動参加をお願い申し上げます。

# 第70回特攻平和観音年次法要

日時 令和3年9月23日(木)

秋分の日 14時〜14時30分

場所 世田谷山観音寺・特攻観音堂

参列者 理事等 14名

## 一 概要

### (1) 式次第

式の開始に先立ち、222名11団体の方から寄せられたお布施を、藤田理事長から太田恵淳住職にお渡ししました。

1 梵鐘点打

2 国歌吹奏

トランペット 堀田 和夫

3 願文「特攻平和観音経」

世田谷山観音寺住職 太田 恵淳

4 祭文奏上

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 藤田 幸生

5 奉納献奏

「海ゆかば」 トランペット 堀田 和夫

6 焼香

7 池前祭 住職読経

(解散)

### (2) 祭文

謹んで在天のご英霊に申し上げます。皆様が、命を懸けて戦われた、大東亜戦

争が終結してから76年が経ちました。今年もここ、世田谷山観音寺での、特攻平和観音年次法要の季節が巡ってまいりました。今年の年次法要は、第70回の節目の法要であります。多くの方が参列を希望されておりました。しかしながら、昨年から新型コロナウイルス禍の収束が未だ見えず、今年も亦、この様に縮小して実施することになりました。誠に申し訳なく、かつ、残念であります。

世界は戦後しばらく、安定成長が続きました。しかし、近ごろは、中国の台頭と、アメリカの衰退傾向を感じております。また再び、混乱の時代へ突入しつつあるのではとの危惧を持っております。戦い方も、先の大戦では航空兵力が戦勢を左右するようになりましたが、今は、宇宙空間から電磁波空間にまでその範囲は広がり、複雑さを増してきているようになっています。

この様な状況の中、皆さんが身を挺して守って下さった我が国日本を、将来にわたって、平和で世界から尊敬される日本国であり続けるようにするのが、私どもの責務であると考えております。昨年延期になったオリンピック、パラリンピック東京大会は、今年はコロナによる緊急事態宣言が発出された中ではあり

ましたが、開催されました。この、困難な状況を克服して大会を整斉と開催できたことは、日本人としての底力を内外に示すことができたのではと思っております。また、各種競技での多くの若者の活躍と、表彰式で君が代を斉唱している姿を見ると、日本の将来に明るい光を見る気がしました。

さらに、近年、多くの災害に見舞われておりますが、その都度お互いに支えあう風景と、多くの若者がボランティアとして災害地で働いている姿を見ることが出来ました。

戦後日本は、GHQによる洗脳教育を受け、自虐史観に捕らわれて、「日本は間違っていた。ダメな国だ」という風潮に流されて来ました。しかし、オリンピックや災害、そして、コロナへの国民の対応等を見ていますと、「国のために頑張る、お互いに支えあう、自分より他人のことを想う」という、日本人古来の美德が未だ健在であることが、明らかになってきたと思われまます。

この「利他の精神」を身を以て示されたのが特攻隊で亡くなられた皆様であります。皆様の示されたこの精神が、未だ今の日本人の中に健在であること、これこそが、常に国を護り、国を興す底力で

あろうと思つているところであります。私たちは、これからもご英霊の皆様が残してくれたこの精神と志を守り、粉骨砕身、ますます努力し、あらゆる困難を乗り越えて、日本の発展と文化の継承に努める所存であります。

どうか在天の英霊、安らかに鎮まりますとともに、私共に一層のお力を賜らんことをお願い願う次第であります。

令和3年9月23日

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会  
理事長 藤田幸生

## 二 寄せられた追悼文、慰霊電報

### (1) 保坂世田谷区長追悼文

先の大戦から76年を迎え、元号も、昭和、平成から令和と代わり、世田谷観音の第70回目の節目となる特攻平和観音年次法要を迎えられました。

私も一昨年まで毎年、世田谷観音の特攻平和観音年次法要に出席させていたでいていましたが、本年も、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が収まらない影響を受けて、やむをえず、寄稿させていただきます。

この度の新型コロナウイルス感染症は、1年半以上を感染が拡大し、区内でも多くの方が患し、いまだに闘病中の方、

後遺症に悩む方に御見舞を申しあげます。また、惜しくも亡くなられた方には心からの弔意を表わします。そして、長く続いているコロナ禍は、区民生活にとつても、未曾有の打撃です。私たちは、直面する困難を乗り越え、英智を結集して何としても平穏な生活環境を回復する決意です。

さて、これまでに、私たちが安心して暮らして行くことができたのも、先の大戦で前途洋々とした未来がありながら絶望的な戦況の中で、平和な世を願い、ご家族や友人、親しい方などに想いを寄せ、大空に散って行かれた特攻隊員の尊い犠牲があつたことを忘れてはなりません。我が国は、戦後76年に渡り、世界中のどの国とも一度も戦火を交えることなく、平和の歴史を積み重ね今日を迎えています。遠ざかる戦争の記憶の中で、改めて、平和の尊さを、先人のご努力を、若い世代に伝え、引き継いでいかなければならないと考えております。

戦後76年が過ぎる中、宮本雅史さんが平成17年に書かれた『「特攻」と遺族の戦後』の本を手にし、その中に、小学校で同級生であつた林義則さんと小栗楓さんの手紙のやり取りを目にしました。

義則さんと楓さんは、小学校2・3・

4年生と同じクラスで、5年生の時に、義則さんが転校され別れて以来、義則さんの出征が決まり、昭和19年3月23日に村役場へ挨拶に来た義則さんと村役場の戸籍係に勤めていた楓さんが再会され、戦死されるまで1年間、手紙のやり取りで心の交流を重ねられています。楓さんは「1年間、手紙のやり取りをしたのですが、それだけで、一緒に暮らしているような気持ちになりました。終戦から60年近く経ちましたが、いつもあの人のことを考えてきましたので、今では、こういう食べ物が好きなんだとか、ああいふの嫌いなんだとか、あの人の嗜好までわかるような気がします」と語られています。手紙の中で、結婚の話は一切なかったが、「一度だけ『ワイフと言うのは有難いものだな』と書いてきたことはありました。手紙を出し合っているうちに一緒になっていたんですね」と恥ずかしそうに答えられています。こうして1年間やり取りされた手紙は、昭和20年4月22日「いよいよ今日出撃する。この期に及んで、何も言うことなし。よく尽くしてくれたお前の心を大切に持つてゆく。君ありて我れ幸せなりし。体を大切に静かに平和に暮らしてくれることを祈る。鹿児島県川辺郡知覧町」を最後に途

切れます。昭和20年10月、義則さんの戦死公報が届き、楓さんが自分の手で戸籍を抹消します。手が震えたそうです。

「まさか、あの人の戸籍を自分の手で抹消するとは……。末期の水を取ってあげる気持ちでした」と。運命は残酷なものです。思いを通わせながら添い遂げる事ができなかったお2人のお気持ちを察すると胸が締め付けられる思いです。

私たちは、戦後76年が経ち、戦争の記憶を継承していくことが難しくなってきました。改めて、恒久平和を希求し、平和の大切さを後世伝え、次世代に対して歴史の証言を確実に伝承していくため、世田谷公園の中の平和資料館を運営してまいります。

結びに、皆様のご健勝をお祈りし、世田谷区長としての挨拶といたします。

(2) 慰霊電報

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会 会長 杉山 蕃 殿

第七十回特攻平和観音年次法要の御齋行に当り、遥かに大前を拝み奉ると共に謹んで御遺族関係者各位の御健勝を御祈り申し上げます。

靖國神社 宮司 山口 建史

第七十回特攻平和観音年次法要のご齋行にあたり、  
国難に殉じられ平和の礎を築られました御霊に対し、  
謹んで哀悼の意を表します。

また、未だ収束の目途の見えない新型コロナウイルス  
感染症下の中、開催に際しご尽力賜りました関係各位に  
心から感謝申しあげます。

戦後、日本の底力を世界へ見せた昭和の東京オリン  
ピック、一年遅れで開催した二回目の東京オリンピック  
が終わりました。開催ができたこの現実、それはやは  
り多くの尊い御霊の上に築かれた「平和」という時代が  
あればこそです。

今日の平和と繁栄をもたらしたものは何であつたのか  
を思う時、時代の変化と共に苦しい事は多様にある中、  
困難を乗り越える「力」を後世に残されたご英霊への感  
謝の念を新たに感じました。

平和の尊さ、命の大切さを後世に語り継いでいかなけ  
ればなりません。皆様方には「平和を語り継ぐ者」とし  
て、今後とも末永くお力添えをいただければ幸いです。  
結びに、ご参集の皆様方のご健勝、ご多幸を心より祈  
念いたします。

一般財団法人 日本遺族会

会長 水落敏栄

第七十回特攻平和観音年次法要の御齋  
行にあたり、英霊の崇高な御遺徳を偲び、  
謹んで哀悼の誠を捧げます。

祖国の平和を守らんがため、若くしてそ  
の身命を捧げた英霊への崇敬と感謝の念  
を深く心に刻み、戦後失われた我が国の誇  
りを取り戻すべく、粉骨碎身努めて参りま  
すことを改めてお誓い申し上げます。

御英霊の安らかならんことと、本日御参  
集の皆様のご健勝と御多幸を心より祈念  
致します。

令和三年九月二十三日

参議院議員

元自衛官

宇都隆史



宇都隆史

三重縣護國神社への特攻勇士之像奉納  
専務理事 兼 事務局長 石井光政

令和3年8月10日(月)、三重縣護國神社に第20体目となる「特攻勇士之像」が奉納されました。これは、本来は昨年4月29日に奉納予定だったものが、新型コロナウイルスの影響を受け、延期になっていたものです。今年も緊急事態宣言が発令されている最中でしたが、これ以上の延期は英霊に対して申し訳ないという判断で、極めて限定された方々の参列で斎行されました。特攻顕彰会からも理事長が参列予定でしたが叶いませんでした。除幕式は英霊にこたえる会三重県本部(会長 中森博文 様)が中心となり、約15名が参列。中森会長の除幕の後、三石浩夫副会長の建立経緯説明が行われ、特攻顕彰会藤田理事長からの挨拶文を青木謙順副会長が読んで下さいました。

三重縣護國神社と英霊にこたえる会三重県本部他、ご尽力いただいた皆様に感謝申し上げます。



三重県特攻勇士之像



祝詞奏上



中森会長による除幕

## 終戦時宰相・鈴木貫太郎大将を偲んで

理事 鮎田 英一

はじめに

令和三年、終戦記念日の東京は、雨の降りしきる肌寒い一日であった。今年もまた、政府主催の全国戦没者追悼式において、先の大戦における三一〇万人の戦没者に追悼の誠が捧げられた。膨大な戦死者数であるが、もし終戦の決定が遅れていれば、その数はさらに増えていたであろう。

一般に戦争は開始よりも終結が難しいと言われる。日本の場合も大東亜戦争終結は困難を極めた。その決定は異例の聖断によつてもたらされたが、その陰には昭和天皇の信任厚い宰相・鈴木貫太郎大将の至誠と献身があったことは広く知られている。連合国との開戦から八十年を迎える令和三年に当たり、終戦の大業をなした鈴木大将を偲び、その生涯及び戦争終結と一億総特攻回避の道筋などについて触れてみたい。

## 海軍士官時代

鈴木貫太郎は、慶應三(一八六七)年、関宿藩(現在の千葉県北西部)家臣・鈴木由哲(ゆうてつ)の長男として生まれ、明治十七(一八八四)年、海軍兵学校に第十四期生として入学した。日清戦争で

水雷艇長として威海衛襲撃に、日露戦争で第四駆逐隊司令として日本海海戦に参加し大きな戦功を挙げている。

大正三(一九一四)年、大隈内閣の海軍次官を命ぜられ、同六年、中将に昇任して練習艦隊司令官として艦隊勤務に復帰、同七年、海軍兵学校を卒業したばかりの少尉候補生達を乗せ、ハワイ、北米を巡行した。帰国後、遠洋航海の編制のまま巡洋艦「浅間」「吾妻」を率いて、秋の九州沖大演習に参加したが、この時の奇縁として、大西瀧治郎の救出劇がある。

鈴木司令官の艦隊は、濟州島と五島列島の間の演習海域で敵艦隊と遭遇し、交戦の結果、演習上「廃艦」と判定され、演習海域からの離脱を命ぜられた。波高く視界不良の海を東進するうちに、暗礁に碎ける白い波頭のようなものが見える。近づくと、乗員二人を乗せ、フロートが破れて波間に漂う海軍の水上機と判明した。聞けば、演習海域の偵察飛行を終え五島方面に戻ろうとしたが、強風のため目的地到着前に燃料切れとなり止むを得ず着水したとのことであった。

鈴木は艦隊と遭遇しなければ救出されることはあり得なかつたであろうが、自身の救出よりも機体の保全を第一とし、最後まで愛機を捨て去ることを潔しとしない二人の態度に接し、鈴木はその責任

感と運の強さを喜んだ。

このうちの一人が、鈴木から後に「立派な飛行将校になった」と評される、特攻作戦開始時の第一航空艦隊司令長官、終戦時の軍令部次長となる大西瀧治郎大尉であった。

その後、鈴木は海軍兵学校長、第二艦隊司令長官、第三艦隊司令長官、呉鎮守府司令長官を経て、大正十二年、大将に昇任。同十三年、聯合艦隊司令長官、同十四年、軍令部長に親補され、昭和四(一九二九)年、予備役編入とともに侍従長に任ぜられた。



正装の鈴木貫太郎海軍大将

(Wikipedia)

## 侍従長時代

侍従長の期間は昭和十一年末まで約八年に及んだ。そのほぼ前半の四年間、陸軍侍従武官の職にあったのが、阿南惟幾(これちか)大佐であった。阿南は後に鈴木内閣の陸相となるが、昭和天皇のそ



ばで共に誠心誠意お仕えしたこの時期に、鈴木と阿南は互いの忠誠心と信頼に足る人柄を深く知るところとなつたと言われている。

侍従長時代に鈴木が遭遇した最大の危難が、二・二六事件における襲撃事件であつた。昭和十一年二月二十六日、青年将校率いる陸軍蹶起部隊が政府・陸軍高官を襲い、鈴木侍従長も「君側の奸」として標的にされたのである。大雪の日の明け方、侍従長官舎に安藤輝三(てるぞう)大尉の指揮する反乱軍が押し入り、至近距離から鈴木の頭、胸などに四発の銃弾を浴びせた。止めを刺そうとする兵に対し、たか夫人が声を張り上げて制したため、指揮官は武器を収め、捧げ銃の敬礼をして引き揚げた。瀕死の鈴木であったが、気丈な夫人が指示した適切な救命活動により、奇跡的に一命をとりとめ、四月半ばには公務に復帰している。

安藤大尉は事件の二年前、鈴木侍従長に面会懇談し、その国家観や人柄に深く敬服するところとなつていたが、侍従長襲撃の任務を引き受けるに至り、事件後、責任を取り自決を試みるも果たせず、七月に軍法会議を経て銃殺刑に処せられている。

### 枢密院議長時代の特攻作戦の開始

昭和十五年、鈴木は枢密院副議長に任

ぜられた。

昭和十六年十二月八日、日本は「自存自衛」と「大東亜ノ新秩序」を目的として掲げ(同年十一月五日「帝国国策遂行要領」)、対米英蘭開戦に踏み切つた。

昭和十九年八月、鈴木は枢密院議長に任ぜられるが、このころ、マリアナ沖海戦の大敗やサイパン島、テニアン島などの失陥により、戦略的持久態勢を再構築する「絶対国防圏」構想は破綻し、日本は守勢一方に追い込まれていく。

昭和十九年十月、フィリピン戦域で決戦を求める捷一号作戦が発動され、初めての航空特別攻撃作戦(神風特攻)が、フィリピン・ルソン島において、大西・第一航空艦隊司令長官により下令された。この特攻を契機として、陸海軍の航空特攻が繰り返され、特攻作戦は海軍水上特攻(震洋部隊)、海軍水中特攻(回天部隊、パラオ方面に出撃)、陸軍水上特攻(海上挺進隊)、空挺特攻さらに戦車特攻にまで及んだ。

昭和二十年を迎えると、フィリピン戦域での敗退はほぼ確実となつていた。今後、米軍は、一二月に小笠原方面、三四月に台湾及び南西諸島、そして秋には本土上陸作戦を強行するものと見積もられた(同年一月二十日「帝国陸海軍作戦計画大綱」)。

この判断に基づき陸海軍は、東シナ海周辺要域における持久戦(天号作戦)と本土における決戦(決号作戦)の準備に着手する。特攻作戦との関係で注目すべきは、天皇の裁可を受けた「帝国陸海軍作戦計画大綱」において「国軍作戦遂行上主要ナル事項」として「特ニ奇襲特攻ヲ作戦上ノ要素」とする旨が明記されたことである。ここにおいて特攻作戦は、陸海軍作戦指導の「主体」的要素として登場し、全軍特攻・一億総特攻への道が開かれたのであつた。

### 鈴木内閣の成立と沖繩戦

昭和二十年三月二十六日、一か月余りの激しい攻防の末、硫黄島が陥落した。同日、米軍は慶良間諸島に上陸、四月一日、沖繩本島への上陸を開始した。

四月五日、小磯国明首相は辞表を提出し、重臣会議において後継首班として鈴木枢密院議長が推挙される。鈴木は「軍人は政治にかかわらず」を固い信条としており、拝辞を願うが、天皇から「もう他に人はいない。頼むからどうか枉げて承知して貰いたい」とのお言葉があり、大命は降下された。

組閣に際し陸軍は、鈴木望む阿南大将を入閣させる条件として、「大東亜戦争の完遂、本土決戦のための施策実行」などを提示したが、陸軍の協力を重要と

考える鈴木は躊躇なくこれを承知し、四月七日、鈴木内閣が発足した。



昭和20年4月7日発足の鈴木内閣  
前列中央が鈴木首相、左奥が阿南陸相  
(Wikipedia)

この日は、海軍第二艦隊が沖繩方面への水上特攻に出撃し、戦艦大和を含む多くの艦艇が、戦闘の末、九州西方沖の海底に沈んだ日でもある。陸海軍は天一号作戦を発動し、沖繩守備隊と特攻兵力により米軍に決戦を挑んでおり、大和水上特攻はその一環であった。このころから沖繩では地上戦とともに、各種兵力による特攻作戦が間断なく繰り返され、戦闘は熾烈を極めていく。

四月十二日、米大統領FDルーズベルトが急逝したが、鈴木首相は「米国民にとって指導力ある大統領の逝去は大きな

損失」であると述べ、米国民に対して「深甚なる弔意」を表明した。ナチス・ドイツがルーズベルトを痛罵し、その死に歓喜したのとは対照的であり、鈴木の手意は武士道精神・騎士道精神の発露として欧米で受け止められた。

このことは必ずしも鈴木自身が意図するところではなかったらしいが、後の戦争終結に向けて、米国知日派との信頼関係維持に一定の外交的効果があったといわれる。

一方で鈴木首相は、元海軍大将として国民の士気、軍の士気を重んじ、時に応じて抗戦論を鼓舞する闘魂の人でもあった。鈴木は和平促進のためにも、沖繩決戦で勝機を見出すことに大きな期待をかけ、四月二十六日、ラジオ放送を通じて、戦場と化した沖繩の島民と兵士に向け、その「勇戦敢闘」に対する「無限の感謝」の言葉を送っている。

五月八日のドイツ無条件降伏の悲報が伝わるころには、沖繩戦の劣勢が明らかになりつつあった。

同月十一日から、総理大臣、陸海軍大臣、陸軍参謀総長、海軍軍令部総長及び外務大臣のみが列席する最高戦争指導会議（いわゆる「六巨頭会談」）が開かれ、四月に日ソ中立条約の破棄を通告してきたソ連との交渉問題が議論された。ここ

で始めて鈴木から戦争終結と講和に関する問題が提起され、対ソ交渉に際して「ソ連の対日参戦防止、好意的中立の獲得、戦争終結に関して有利な仲介をなさしめる」ことが了解された。

六月六日、沖繩方面根拠地隊司令官・太田實中將が自決を前に、沖繩戦の惨状と県民の献身ぶりを伝え「県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」訴える最終電報を発信する。

鈴木が希望を託した沖繩戦の敗色は濃厚となっていた。

同月八日、御前会議において「今後採ルヘキ戦争指導ノ基本大綱」が決定した。その「方針」には陸軍の強硬論が反映され「政戦一致飽ク迄戦争ヲ遂行スル」とあり、徹底抗戦が強く主張されていた。一方で戦争目的に関しては、開戦時の「自存自衛」と「大東亜ノ新秩序」という二つの理念的目標が姿を消し、「国体ヲ護持」し「皇土ヲ保衛」するという二目的に限定されていた。

これに関し陸軍は戦争目的を限定したとはいえず、国体護持は本土決戦における「一撃必勝」のみによって達成されるという「一撃講和」を考えており、外相などは本土決戦前の交渉による国体護持の確保を考えていた。

以後、戦争終結に向けて、国体護持の

手段として軍事力か外交交渉かの議論が政府上層部で続いていくが、鈴木自身は戦争目的が限定されたことよって「戦争終末への努力の足がかり」ができたように思っていた。

御前会議の数日後、天皇に対し、満州・大陸方面の視察から戻った梅津美治郎・陸軍参謀総長と、海軍戦力の特命査察を終えた長谷川清・海軍大將は、国力の消耗に関する極めて率直な現状報告をして、陸海軍の戦備が本土決戦を遂行するには全く不十分であると奏上している。

このような経緯があり、六月二十二日、天皇の発意により最高戦争指導会議（六巨頭会談）が召集された。

天皇から、戦争指導は六月八日の御前会議で決定をみているが「戦争の終結についても従来の観念にとらわれることなく、速やかに具体的研究を遂げ、その実現に努力することを望む」とのお言葉があった。かねてより鈴木は天皇の和平への願いを以心伝心で感じていたが、ここに始めて天皇から直接、早期講和の意思が表明され、鈴木は戦争終結に邁進する決意を強めた。

六月二十三日、沖縄守備軍最高指揮官・牛島満中將が、摩文仁の軍司令部で自決し、沖縄守備軍の組織的抵抗が終結した。熾烈を極めた天号作戦では、航空特攻で

約一九〇〇機、二千名以上の兵士が散華し、この他、各種兵力による幾多の特攻作戦が決行されており、戦死者は軍民合わせて二十万人前後に及んでいる。

既に機動艦隊を失った海軍は、沖縄戦こそ最終決戦と考えていたが、本土作戦こそ最終決戦とみなす陸軍を中心に、両軍統帥部の関心は本土決戦へと移っていく。行政面でも、徹底抗戦態勢を構築するための「戦時緊急措置法」及び広く国民を「国民義勇戦闘隊」に動員する「義勇兵役法」が、同日に公布され、本土決戦



千葉県・九十九里浜における、国民義勇戦闘隊の原組織となる国民義勇隊の訓練風景 (Wikipedia)

に向かう国内態勢は着々と整えられていった。  
**鈴木内閣と終戦**

七月に入ってからB二九戦略爆撃機による日本本土への無差別爆撃は執拗に続き、空襲は激化していた。さらにB二九の機雷投下により日本の内外航路はほぼ完全に封鎖され、陸上の交通網も麻痺し、国民生活、特に食糧事情、燃料事情は悪化の一途をたどる。

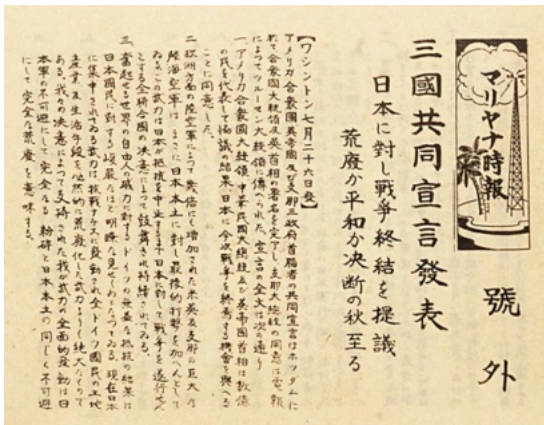
七月上旬、鈴木首相は官邸において「国民義勇戦闘隊」が使用する武器を見学したが、展示品は、先込め単発銃、竹槍、刺又などの前時代的武器であり、鈴木は思わず「これはひどいな」とつぶやいた。

鈴木は苦しい立場に置かれていた。国力の払底を認識しつつも、首相として国民と軍の士気を維持するため、和平が決まる最後の瞬間まで「徹底抗戦」を叫ばねばならず、一方で、政府上層部において秘密裡に対ソ交渉を進める必要があった。ところがソ連への和平仲介申し入れは、米英に対する和平条件やソ連に対する仲介代償案がまとまらず、しかも徹底抗戦派による国内の反乱も警戒しなければならず、いたずらに時間のみが浪費されていった。

七月二十七日、アメリカ、イギリス及び中華民国首脳によるポツダム宣言が発表された。同宣言について外務省は、宣

言の内容は故ルーズベルト米大統領が固執した「無条件降伏」の主張でなく、日本国政府の主導により日本軍の無条件降伏を促す「有条件講和」の申し出であり、国体護持も可能であると判断したが、政府はソ連の立場を確認する必要があるため暫く意思表示を保留することとした。

七月三十日、ポツダム宣言に関する鈴木首相談話が発表された。「ポツダム宣言を黙殺し、断固戦争遂行に邁進する」との談話内容は、結果的に連合国への拒否回答と受け取られ、ソ連参戦や原爆投下の口実となったとする説もあるが、実際には、ソ連は二月のヤルタ会談でドイツ敗戦から九十日後の対日参戦を密約し



ポツダム宣言に関する日本国民向けの米軍投下ビラ。(国立国会図書館デジタルアーカイブ)

ており、米国はマンハッタン計画に基づく予定行動として原爆投下を既に命令していた。

とはいえ鈴木自身は戦後、軍の徹底抗戦派の意向に配慮した「黙殺談話」が、国際的に複雑な波紋をもたらしたことを痛切に悔やんでいる。

政府が対ソ交渉のため特使の派遣を模索するうちに、八月六日、広島に原子爆弾が投下された。現地の恐るべき被害が次々と報告され、八日に新型爆弾は原子爆弾であることが確認され、これに加えて九日未明、ソ連の対日参戦の報がもたらされた。

このような状況に内閣の対応としては、「総辞職、ポツダム宣言の受諾、戦争継続」の三案があり得た。鈴木は自分の内閣で戦争の決着をつけるべく「ポツダム宣言受諾」を選びとり、九日の最高戦争指導会議に臨む。

会議冒頭、鈴木は広島への原爆投下とソ連参戦により、もはやポツダム宣言受諾やむなしと提議した。会議途中で長崎への原爆投下の報告がもたらされるが、最高戦争指導会議も、引き続き深夜まで開催された閣議も、ポツダム宣言受諾の条件をめぐり紛糾した。

外相の「天皇の国法上の地位の保証(国体護持)」のみを留保する(一条件

案)と、この他に「武装解除、戦争犯罪人処罰、保障占領」にも要求を加える案(四条件案)の対立であった。

この間、阿南陸相は四条件案を支持し強硬な抗戦論を主張し続けている。陸相辞職によって内閣を総辞職に追い込む可能性が危惧されたが、阿南は鈴木内閣で終戦の決着を付けることを信念とし、最後まで陸相として輔弼責任を全うすることに努めた。



阿南幾惟陸軍大将 (Wikipedia)

鈴木の主導により、八月十日午前零時ごろ、御前における最高戦争指導会議が始まった。今後、和平に向けた国際条約の扱いに関し枢密院で審議・承認を得る必要から、平沼・枢密院議長を加えての会議となり、一条件案(外相、海相、枢密院議長が賛成)と四条件案(陸相、陸・海軍統帥部総長が賛成)が対立し、議論は平行線を続けた。

深夜二時に至り、鈴木は自らの意見は表明せず進行役に徹し、聖断により会議の結論とすることを願った。

天皇は「外務大臣の案に賛成である」ことを述べられ、併せて、関東の防御陣地構築が遅れ、本土決戦準備の計画と実行が不一致であることが指摘され、軍に對する強い不信の念が表明された。

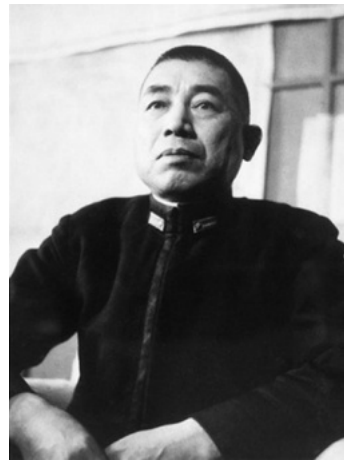
この直後の閣議で「国体問題のみに關する了解付きでポツダム宣言を受諾すること」が決定されるが、十日午前に発信された連合国宛の電文は、宣言受諾の一方的通告でなく、阿南陸相などの意見を入れて、日本は「天皇の国家統治の大権が変更されるものではない」と了解してポツダム宣言を受諾するものであり、この了解が誤っていないことにつき連合国側の明確な意向を求める内容となった。

八月十二日、連合国側から回答電文（「バーンズ回答」）がもたらされた。

回答の中の「天皇及び日本国政府の統治大権が、連合国最高司令官の制限の下におかれる」及び「日本国政府の形態は日本国民の自由意思によって決定される」という事項の解釈が大問題となった。

外務省などは、バーンズ回答で国体護持は可能と考えたが、陸軍は、これでは国体護持はできず断固反対であると訴えた。海軍でも大西軍令部次長が、陸相に

對してまで徹底抗戦論を働きかけていたが、米内海相がその越権行為を激しい剣幕で叱責したことにより、やがて海軍側の動搖は収まった。



大西瀧治郎海軍中將 (Wikipedia)

十二日、十三日の最高戦争指導会議及び閣議では、国体護持の問題のみならず改めて武装解除と保障占領の問題が延々と議論され、これらの論点を含めて連合国側に対し「再照会する」か「戦争を継続する」か、あるいは「ポツダム宣言をそのまま受諾する」かの三案をめぐり、決着はつかなかつた。

こうした膠着状態を破るため、一四日に至り、鈴木は「天皇の思し召しによる御前會議」を発意し宮中の賛同を得た。

八月十四日午前十時前、全閣僚、両軍統帥部総長、枢密院議長らが召集され御前會議が開催された。鈴木は、ポツダム宣言受諾による戦争終結案に反対している陸相と両総長に反対意見を奏上させたあ

と、天皇の再度の聖断を願った。

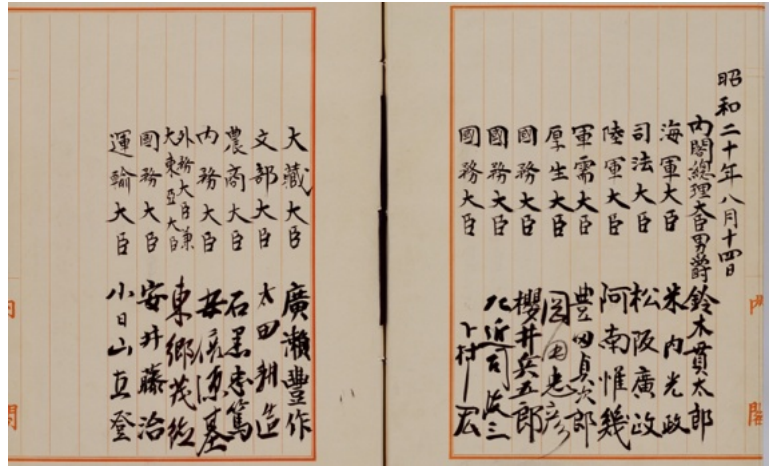
天皇から「これ以上の戦争継続は無理であり、ポツダム宣言を即時受諾すべきこと」、「国民全体の信念と覚悟」があれば国体護持問題については決して悲觀的になる必要がないこと、武装解除や保障占領については「堪え難きを堪え忍び難きを忍び、一致協力将来の回復に」期待したいとの切々たるお言葉があり、最後の聖断が下されたのであつた。

同日午後の閣議で阿南陸相を含む全閣僚が、戦争終結を確定する閣議決定（終戦詔書）に副署した。

引き続き阿南は陸軍中央に組織としての「承詔必謹」を徹底させた後、夜半、官邸に鈴木を訪れ訣別の挨拶を済ませ、陸相官舎に戻り十五日未明、「一死もつて大罪を謝し奉る」の遺書を残し割腹自決を遂げた。

一方で鈴木は深夜、私邸に戻つたところ、鈴木内閣による終戦を不服とする暴徒集団が迫り来るとの連絡を受け、大慌てで一家総員、逃げ支度をした。襲撃暴徒とは間一髪ですれ違い難を逃れたが、私邸は機関銃を撃ち込まれ、ガソリンで丸焼きにされている。

八月十五日正午、鈴木は終戦の玉音放送を宮中で拝聴し、最後の閣議を経て総辞職願を提出、夕刻、最後の公務となる



終戦詔書の各大臣副書  
(国立公文書館デジタルアーカイブス)

国民向け首相談話をラジオで放送した。大西中将は、玉音放送を海軍省中庭で拝聴し、鈴木内閣最後の日となった十六日、軍令部次長官舎で「特攻隊英霊に日善く戦ひたり深謝す」に始まる遺書を残し割腹自決を果たした。

こうして鈴木内閣における終戦の決定により、本土決戦・一億総特攻は実現を見ることなく終わった。

### 幻となった一億総特攻

本土決戦を企図する「決号作戦」はついに発動されなかった。昭和二十年一月から作戦準備は始まつており、組織編制面では、四月に陸軍は、敵進攻が予想される関東と九州の重要方面に対処し、各方面軍を指揮する東日本の第一総軍と西日本の第二総軍及び航空総軍を編成し、海軍も全海軍部隊を統一指揮する海軍総司令部組織を設置していた。

作戦要領としては、「各種特攻攻撃を以て敵船団の洋上及び水際撃破を重視する(昭和二十年三月二十日、大海指第五一三号)」、「犠牲の如何を顧慮することなく、敵上陸海岸では水際決戦を遂行し、後退配備はとらない(昭和二十年六月二十日、本土決戦根本義の徹底に関する件、参謀次長通達)」という、全軍的な特攻作戦を基本としていた。しかし六月の時点で天皇に奏上されたように、国力は払底し、構想を実現するための戦備は不十分と言わざるを得なかった。

それでも終戦時には、陸軍の本土防備兵力の他、練習機を含めて約一万機の航空機、陸海軍合わせて約三千〜五千の水上小型艇(マルレ、震洋)並びに数百の小型潜水艇などが保有されていたと言わ

れる。

仮にポツダム宣言受諾が決定されていなければ、戦争は継続し、秋に予想された米軍上陸進攻作戦に際し、これらの兵器が一億総特攻の旗印の下、特攻作戦に投入されていた可能性が大きい。あるいは、その前に第三、第四の原爆が投下され、ソ連の北海道上陸が進んでいたかもしれず、いずれにせよ、一般国民及び軍人の死傷者数は膨大な数に及んでいたであろう。



呉のドックに残された建造途中の特殊潜航艇「蛟龍」。戦争継続の場合、本土決戦に使用された可能性がある。(Wikipedia)

ところで鈴木首相は特攻作戦をどう評価していたのであろうか。

『鈴木貫太郎自伝』の中で鈴木は「特攻

隊出撃は、その壮挙に参加する将兵の士気は感激の涙を禁じ得ないところであるが、戦術上の立場からいえば、玉碎主義は明らかに敗戦主義であると認められた。いやしくも名將は特攻隊の力は借りないであろう。日露戦役の時の旅順閉塞隊は当時の挺身隊ではあったが、この出撃に際しては、閉塞隊の人間を救う手段がなければ許可されなかった。

・・・特攻隊はまったく生還を期さない一種の自殺戦術である。こうした戦術でなければ、戦勢が挽回できなくなつたといふことは明らかに負けである。

・・・特攻隊戦術は優秀な将兵を次々と犠牲にして行つたがために、後に残る者を訓練するものがなくなつて、勇士の技術、質は低下する一方だつた」と痛憤の思いを語っている。

戦理にもとる非道な特攻作戦にまで追い詰められた「明らかな負け戦」においても、鈴木は和平の道を探るため、徹底抗戦を叫ばねばならなかつたのであつた。

おわりに

その後の鈴木大将と観音菩薩の御縁

昭和二十年十一月、鈴木大将は故郷の閑宿に居を構えるが、十二月、請われて再び枢密院議長職に復帰、新憲法草案の審議と承認に力を尽くした後、昭和二十



の冢 将を月 大書 3年 鈴木 3年 内、平 境開 社世 神萬 國為 靖「 刻

一年六月、最後のご奉公を終えて閑宿に隠棲する。閑宿では地元の酪農事業振興にも汗を流し、地域住民から敬愛され、穏やかな余生を送つた。

鈴木は人生で何度も生死の危機に見舞われたが、「目に見えぬ大きな力が自分の身辺にあつて、そのご加護で、当然死なねばならぬ場面に出合いながらも、危ないところをまぬかれてきた」と信じ、神仏に対し深い尊崇と感謝の念を抱いていた。

とりわけ靈魂の不滅を疑わず、夫婦共々厚い観音信仰の持ち主であつた。二・二六事件の凶弾に倒れ生死の境をさまよつた時にも、鈴木は「奈良の観音様が夢に現れ、助かるから心配するなどのお言葉をとたまわつた」と夫人に告げ、奇跡的快復を遂げている。

鈴木は昭和二十三年に入り、肝臓癌が

進行し病床に臥せがちとなつた。四月十七日、危篤状態となつた鈴木であつたが、その口元からは、はつきりと「永遠の平和、永遠の平和」と繰り返す言葉が聞かれたという。この日、見守る数十人の家人・近親者が「念彼観音力」の観音経偈を大きく唱和する中、鈴木は安らかに息を引き取り、八十一歳の生涯を終えた。たか夫人は、その後も閑宿の発展に尽くし、昭和四十六年、八十八年の生涯を閉じている。



鈴木貫太郎・たか夫人 妻 (千葉県野田市提供)

この観音信仰に関連して余談めいたことに触れれば、阿南大将の綾子(あやこ)夫人は、戦後、軍人遺族が苦しい生活を送らざるを得なかつた時代にあつても四人の子供を立派に育て上げており、その後、昭和四十六年、仏門に入った。阿南大将を含む戦没者の菩提を弔うためと言われる。

綾子夫人が晩年を過ごしたのが長野県

の蓼科山聖光寺で、寺は奈良・法相宗薬師寺の別院、本尊は観音菩薩である。昭和五十八年、八十四歳で亡くなっている。大西中将の淑恵（よしえ）夫人も、軍人遺族の例外にもれず苦勞する日々を送っていたが、昭和二十七年秋、横浜市鶴見区の曹洞宗大本山總持寺に、念願であった大西中将の墓と、その横に特攻隊で散華した隊員を慰霊する「海鷲観音」と名付けた観音像を建立している。

淑恵夫人は、昭和五十三年、七十八歳で亡くなるまで、特攻隊戦没者に対する慰霊活動の道を歩み続けた。

（写真は海鷲観音、令和3年9月撮影）



最後に、鈴木侍従長を襲い、二・二六事件の首謀者として刑死した安藤大尉である。

襲撃を終え敬礼して立ち去ろうとする

指揮官に、たか夫人は誰何したが、安藤輝三と名乗った青年士官の姿に「あの純粋な情熱に燃えた青年の眸」は忘れることができないと述懐している。鈴木自身も「まことに立派な惜しいというよりも、むしろ可愛い青年将校であった。間違った思想の犠牲になったのは気の毒千万に思う」と自伝に述べ、ともに全く恨みがましい言葉は残していない。

その安藤大尉が処刑された、渋谷区NHK放送センター近くにある陸軍刑務所跡には、遺族たちによって大きな観音像が昭和四十年に建立されており、二・二六事件で刑死あるいは自決した首謀者とともに、政府高官、警察官などの遭難者も慰霊されている。波乱万丈の一生を送った鈴木大将であったが、生前、特に深いかわりを持った人々と、恩讐を越え、怨親平等大慈大悲の観音様の心で今も不思議な御縁に結ばれているのかもしれない。

主要参考文献

鈴木一編『鈴木貫太郎自伝』

時事通信社、一九六八年

小堀桂一郎『鈴木貫太郎』

ミネルヴァ書房、二〇一六年

半藤一利『聖断』

PHP研究所、二〇〇六年

波多野澄雄『宰相鈴木貫太郎の決断』

岩波書店、二〇一五年

戸部良一ほか『決定版大東亜戦争（上）

（下）』新潮新書、二〇二一年

鈴木たか『観音信仰に生きた鈴木貫太郎』

大法輪二二巻二号（一九五五年）

土門周平ほか『本土決戦』

光人社NF文庫、二〇一五年

防衛庁戦史叢書『本土決戦準備（1）

関東の防衛』等 朝雲新聞社



二・二六事件で刑死した安藤大尉を含む首謀者二十二名並びに事件の犠牲者を慰霊する観音像、昭和40年東京都渋谷区田川町の陸軍刑務所跡に建立（令和3年9月撮影）



2107 多田野語録  
「二灯破關」

會員 多田野 弘

一つの灯を自らの心に掲げて歩み切ることを意味している。昨年10月、私は100歳を超えた。今も毎月致知誌のテーマに沿って、パソコンに向かい、自分の考えをまとめていく。この有難い長寿に恵まれたのは、健全な体質と伶俐な頭脳を、父母から与えられていたからに違いない。

特に、父から受けた精神的な感化は大きかった。長男の私に大きな期待が寄せられているのを常に感じていたが、叱責を受けたことは一度もなかった。温かく見守ってくれる父は、威厳があり怖い存在だった。家では勉強した覚えはないが、成績は6年間首席だった。この6年間は私の人間形成に影響を与えた。私は皆と同じではない、自分の考えをもつ必要を心に抱いていた。そのためか自ずと自分を客観視し、孤独を好むようになっていた。客観視することから自制心が生まれ、その自制と自律が克己の喜びを齎した。父は若い時に習得した溶接の技術を素に独立し、零細な工場を営んでいた。私を後継者にするべく、大阪の職工学校に行くことを勧めてくれた。職工という名前に嫌な気がしたが、府立であり、競争

率が8倍と聞いて思い直した。当時、高松中学の競争率は2.5倍だったのを記憶している。それにしても、13歳の私を大阪へ送り出した父の英断は、わが子を持つてみて初めて、大きな愛であることを知った。かわいい子には旅をさせである。母は私一人での下宿生活を案じて、よく励まし、の便りをくれた。母の愛も深かった。

卒業した昭和13年、日本には徴兵制度があった。私は徴兵年1年前に志願して、昭和14年10月横須賀海軍航空隊に入った。かねて、海軍は殴って教えるところだと聞いていたが、聞きしに勝る厳しい訓練が待っていた。「動作が鈍い、気合が入っていない、娑婆っ気が抜けてない」などと怒鳴られ、その度に鉄拳を頂戴した。それが1年間続いた。3年の兵役が1年で済むのだから、厳しいのは当然であり、その効果も目覚ましかつた。1年後の私は、心身共に自分でも見違えるほどの逞しさを身につけていた。この殴って教えてくれた貴重な体験は、私の一生の宝になっており、100歳を迎えられたのはこの時の鍛錬のおかげである。海軍の訓練に感謝してやまない。

志願したのは私だけであった。私の徴兵1年前の志願や、生死が危ぶまれる前線への赴任希望は、20歳の時に単身で北海道へ飛び込んでいった父の、血気盛んな血が私にも流れていたといえる。

その後3年余にわたる前線の体験は、私の一生を覆すほどの学びがあった。死に正面から向かい合い、自分が魂の存在であることに気づいたのである。死を覚悟し、死を決意するのは、理性や心でつ開きがある。生きることと断念し、いつ死んでもよい心境になって初めて、命を投げ出す行動ができる。その死生を超えた心境は、魂からしか生まれないと身をもって知った。

いつ死んでもよいという悟りの心境が、死に向かつて突き進ませる行動となった。というのと、いかにも戦争や軍隊を賛美しているかのように思われるだろう。だが、たとえ平和な時代においても、私達には必ず死は訪れる。死を覚悟し、受け入れることは、戦場と少しも違わないではないか。死を恐れていてどうして幸せになれるだろうか。しかし、今の時代では死と向かい合い、いつ死んでもよい生き方への悟りの境地は得られ難いだろう。幸いにも私は、戦場で死と向かい合う中でそれを手中にできた。

思えば、波乱に満ちた私の人生は、運

命に翻弄されたが、その運命はまた自分がつくってきたともいえる。自分にまつわるすべての出来事には意味があり、事故や災難、失敗や病気さえも尊い教訓が含まれていた。それらは、必要だから与えられたのだと受け取り、皆プラスに変えることができた。父から示された一灯が、私の乏しい能力を発揮させ歩む道を照らし、悔いなし人生にしてくれたといえる。

### 1 著者の軍歴

昭和14年海軍に入隊、航空機整備兵となる

昭和18年、ラバウル、サイパン、トラツク諸島、ペリリュー島、フィリピンへと転任、同地マバラカット飛行場に於いて、

昭和19年10月25日 最初の神風特別攻撃隊の出撃を見送る。その後、整備員として特攻作戦に参加、多くの特攻機を見送った。

基地員として、命懸けの特攻作戦を経て、昭和20年1月茨城県の戦闘306飛行隊に転任。8月、宮崎県富高で終戦を迎える。

復員後、株式会社タダノ創業者多田野益雄(父)とともに日本で最初の油圧式トラッククレーンを創りあげた。

現在はタダノ名誉顧問に在籍。戦後、民間人として、戦時中の、特攻隊員等戦没者の慰霊顕彰に尽力。

2 その他(以下の情報がネットで検索可能です)

・NHKアーカイブ「多田野弘さん証言-N

HK戦争証言アーカイブス  
株式会社タダノのホームページ  
Tadano.co.jp / 企業 / 航海日誌  
エッセイ「航海日誌」

### 築城基地五十年史より(其の五)

#### 九三式中練特攻隊員の回想(続)

会員 水町博勝

### 築城基地における

#### 特攻隊員としての記録

元海軍一等飛行兵曹 奥本 信一

昭和十九年七月二十五日第十三期前期甲種予科練習生であり、又美保空第一期生を卒業し転任先の異なる同期生と別れ

一年間生活をした美保空を十四期生の帽振れに送られて、三十九期飛行科練習生として九三中練(赤トンボ)の飛んでいる築城の駅に到着、築城航空隊の隊門を通り兵舎に入る。先輩甲飛十二期生、飛練三十七期生を帽振れで見送り愈々ペアの編成も終わり、初めてコントロール・ステイックを握ったのは八月四日であった。分隊長は、昔フアルマン機に乗っていたという大尉。前任教員、次席教員はラバウル帰りというメンバーであった。

殴られ叩かれ、浴場で尻の色を比べながら、歌の文句ではないけれど、「ハイハイ返事はしているものの何処が西やら東やら」の状態から旋回計の玉も滑らなくなり、少し離着陸にも自信が付き、教

員、教官の馬鹿野郎と叫びながら、耳の伝声管の声もなく、気持ちよく歌を唄いながらの単独飛行は、未だに忘れられない思い出である。

パイロットは誰でも同じであろうと思うがどうであろうか。

特殊飛行、編隊飛行、計器飛行と訓練を重ねながら、卒業したらどの機種になるかなど、機種希望を出したりして卒業を待ち、教官からも誰々は艦爆かな、戦闘機かな、との話しが出る頃、戦局愈々苛烈し特攻隊編成の話しが話題になる様になった。

明けて昭和二十年二月二十日飛行分隊の全員集合があり、志願者の中から選考決定された特攻隊員の名簿発表があり私もその一員となったのであった。二十三日私は飛行第二大隊第二中隊第二小隊の四番機として編成後初の飛行作業に就いたのであった。

今までの編隊は三機であったが複編隊で四機編隊であり、三機編隊のときとは勝手が違い四機になるとレバーの操作に少々戸惑いを感じたものであった。

編隊離陸(四機) 訓練、複編隊飛行

(一番機から三番まで交代で飛行する)、

計器飛行訓練、定着訓練、降爆擬襲訓練(降下角度四十度以上と設定されても後席からヨーイ、テーの合図でステイックを引き体にGの掛るのを気持ちよく感じ

ながら機体を引き起こし、今回の角度は十分だろうと話をしながら着陸、指揮所に帰り記録を見ると未だ浅く、降下の時の加速で機が浮き目標を外すのが原因と思われ、中々難しいと感じたものでした。

三月に入ってから薄暮定着訓練が始まり、夜間飛行も開始された。最初は舷灯、編隊灯をつけて一番機を少し上に見ながら編隊を組むのは比較的楽であるが、次には灯火を消して、エンジンより出る排気管の炎のみで編隊を組む訓練に入った。月夜は機体が月光に照らされて編隊を組むのは比較的楽であるが、曇天の闇夜の編隊飛行は難しく緊張の連続であった。然し夜の空から見る地上は美しく、白く光る波頭、道路、家の瓦、灯火管制もあり効果が無いものではないかと思つたものであった。

五月の殉職者は四名であった。一機は海に墜落し救助できず、一機は離陸目標灯と格納庫の上の危険灯の赤灯と間違えたらしく、格納庫に突っ込んだものであり、大分疲労が溜まってきたのかもしれない。このあいだにも、戦局愈々急となり、グラマン等の襲撃を受け、飛行場の「タコ壺」に退避している所、機銃掃射を受け、危うく十三ミリの弾を食らう所であり、肝を冷やしたものである。

銀河隊の出撃もあり、我々も五航艦十二航戦に編入となり夜間飛行の練度もま

すます充実し、自信もついていたものであった。

五月五日移動訓練及び航法訓練を兼ねて四国の観音寺空に飛ぶ事となった。朝早くの出発で、編隊を（私は四番機）組み瀬戸内海を東上、国東半島を右に眺め高度も一、〇〇〇メートル四機編隊で飛行する。海上に艦隊を見ながら又瀬戸内に点々と浮かぶ島々の美しい眺めに気をとられて、編隊の間隔をあけて、一番機に早く距離をつめると合図を受ける始末であった。しかし空からの眺めは最高であった。佐多岬の瀬戸内海と豊後水道とを分けているような細く、長い陸地を右に見ながら、東上を続け西条を右手に見る頃より、前方に観音寺空がうすく見えてきた。上空から下を見ると浜辺に丸く寛永通宝と掘つてあり珍しいものであった。（現在でもあるのだろうか）着陸後、整列、訓辞、解散、休憩のとき上空をB―二十九であろうか編隊を組み通過していった。何所へ爆撃に行くのだろうか、目標にされた所のことを思うと胸が痛み、やるせない思いであった。

帰隊後、後続の編隊が遅くどうしたのかと心配していたら、同期の岩崎が離陸して、編隊を組むべく上昇したが速度がまだ不足でスピンになり、墜落死亡したとのことであった。上海空に転勤する同期生を見送り、仲の良かった友とも別れ、

飛行場の端に落ちる夕陽を見る時、万感胸に迫るものがありました。

今でも忘れられない想い出は、編隊を組みながら、雲の中に入り二メートル先も判らず、不安一杯ながらも見張りを厳重に衝突の用心をしながら上昇、雲の上に出て一番機の方を見ると、遠くにあり、編隊を組みなおす、雲中飛行は単機に限る、編隊は困るなどと話しながら雲上飛行をしながら太陽の反対側を見て驚いた。綿のような雲海の上にオリンピックの旗のように丸い虹がいくつも出来て、その中に我が乗機がそっくり入っている。初めての経験であり、カメラでもあれば撮るのにと、今でも残念である。また、赤トンボとはいえ二十四機の編隊飛行は見事なものであった。但し二十四番機になつた者の話を聞くと、内側旋回の時は失速寸前であり、外側旋回の時はレバーを全開しても追いつけぬとこぼしていた。しかし、空を一杯に覆った様な感じであり、壮観な眺めであった。

六月になつてからは、敵襲も激しくなり定期化していった。その間を縫うようにして訓練が続く、夜間訓練が終わって分散兵舎に帰り、昼間眠り、夕暮れ前に飛行場に行き、飛行作業の準備をする（私は搭乗割り係として、整備科へ行き飛行機番号を聞き、搭乗員に乗機の割り振りをする係であった）、昼は休み夜起

きて動くという、鳥のフクロウの様な不規則な生活が続いていた。

今までの殉職者のうち、残念であったのは、一大隊が航法訓練で鹿屋基地へ白菊に便乗していった時である。夜帰投したのは一機であり他は何処かに不時着したらしく、朝になって汽車で帰ってくるが、一機だけ帰らず、大隅半島の内ノ浦の海に不時着し、生存者一名、他は脱出できずに機と共に沈み四名だったかが死亡、一週間後に遺体が浮き収容するという事故があり、又空襲があり夜間戦闘機、月光が離陸するため滑走路の飛行機を移動中に衝突し、月光は脚を折り、誘導中の上野兵曹はペラに打たれて死亡という事故、又々格納庫の赤灯を離陸目標灯と間違えて突っ込むという事故(魔の格納庫と我々は話をしてきた)、しかし辛いにも一名は無事であった。大分昼夜の逆生活で疲労が蓄積してきたのかもしれない。

爆装編隊、夜間編隊と訓練を重ね我田引水かもしれないが、自信も十分ついた頃、五航艦の長官が立ち寄ったことがあり、練度優秀とのことであったと隊長が伝えてくる。七月十八日に一大隊の佐伯組が佐伯空に転進する。又、宇佐空が爆撃を受け、混乱したのもこの頃であった。七月も中旬頃、築城組、佐伯組、日出生台組と編成されて、私は築城組の方であったが、七月二十九日の夜間訓練中に八幡方面に空襲があり、全機帰投の探照灯による終信符を発するも、一機だけ帰らず(前席操縦鈴木、後席見張り及びオルジス「回光通信」係りは竹本)頭上を敵機が飛んでいくし、小倉・八幡方面は曳光弾や火災の火が見えられ、仕方なく飛行場の施設灯、着陸灯等を消すことを隊長が決意され、灯火を消すことを命令され消すが、その後頭上を飛んでいるのが爆音やら、発火信号により判るのであるが、灯火をつけるわけにいかず早く空襲の終わるのを待つのみであった。そのうち爆音が聞こえなくなり心配していたところ、翌朝陸軍からの知らせで、直方市東方六キロメートルの山に衝突炎上の機ありとの事、機番号及び搭乗割りにより鈴木、竹本と判明した、誠に残念な事であった。

見張りが悪く帰投信号を見落としたりか、遠くまで行っていたので判らなかつたのか?これで此の隊にいる同僚人を亡くしたのである。そのかわりに急遽私が出生台組となり、空輸に参加することになったのである。日出生台の隠密飛行場は三方山に囲まれ前は谷であり、滑走路は狭く、爆装での離陸は大変難しいなと思ったものでした。帰りは四時間程トラックで湯布院を通り、別府泊りであった。

八月六日海の彼方に変な入道雲を望見する、暫く定期便が来ないなど思った矢先の、七分分散兵舎に居る時、飛行場が大規模の空襲を受け、多数の死傷者が出ることになる。この時の死者三十余名、負傷者は数十名に達し、その中には民間の方も含まれていた。火葬場の棺桶も間にあわず、死者は椎田の川の河川敷きで足元に番号の書いた石を置き火葬に附したのであった。

連日連夜空襲の間を縫っての訓練が続く、人間も夜ばかり起きていると、夜でも目が見えるようになるものである。八月十四日出撃待機命令があり、愈々来たかと身の回りの整理やら髪や爪を切り、紙に包み遺書らしきものを書き下宿の私物のトランクに納める。それとなく下宿の方に永い間のお世話に感謝して別れを告げる。あまり悲壮感はない様であった。

別杯をくみかわし、明けて十五日朝、

飛行場に行くとは何か不気味な程シーンとした感じがした。定期便の空襲も無く、静かな飛行場にいると正午頃に重大放送があるという、聞きづらく判らなかつたが、これが終戦の勅語であつた。

余談になるけれど、人間個々に運・不運というものがある。同一格納庫に突っ込んで片方は死亡し、片方は無傷のこともあり、京都出身の杉村の様に一度は低空飛行で一番機について行き山の木に引掛り、前歯を折つただけで助かり、

(今でもその機はあるはず)二度目は混乱した宇佐空の爆弾による穴だらけの所に不時着し爆発にも会わずに帰ってくる始末である。特攻隊編成から終戦までに殉職、死亡したのは十一名であつたと思う。復員のとき海軍葬も出来なかつた、唯一人の同県人である故竹本の遺骨及び遺品を持ち、もう二週間生きていたらと残念でならなかつた。

皆同じかも知れぬが訓練を通して思ったことは、慣熟するということは頭で考へるより先に体が反応して操作してしまふこともかも知れない。やはり訓練の成果であろう。慣れるという事とは大分違ふと思うが、いかなものだろうか?

以上のように書いてきたものは、今手元に唯一残っている航空記録及び備忘録を基に書いたものである。飛行時間は約

二百三十時間程、其の内百六十時間程は夜間飛行である。今でも空を飛びたいと思ふ気持ちがあるが夢のまた夢か。半世紀を過ぎた今思うに特攻隊編成の時、志願したのは国の為という気持ちと、どうしても空を飛びたいという気持ちとどちらかと思うことがある。教育のせいかもしれない、今は無き戦友の冥福を祈り又別れた戦友達の健康を願つて止まない。

### 奥本氏略歴

昭和十八年九月美保空入隊十三期甲飛

十九年七月築城空三十九期飛行学生

二十年二月特攻隊員となる

平成三年(有)信和建工代表取締役

### 筆者追記

昭和十九年十二月二十七日第一期飛行

専修予備生徒卒業・転属

戦闘機 築城空 百三十二名

艦爆 宇佐空 三十七名

艦攻 姫路空 三十七名

陸攻 豊橋空 五十名

昭和二十年二月十八日築城空においては

特攻志願の調査が行われ、二月二十日特

攻隊員の甲飛十三期四十名余りの名簿が

発表され、同日、九三中練による特別攻

撃隊が編成されました。

そして各機種転属者も艦爆(九九式艦爆、

彗星)、艦攻(流星、九七式艦攻、天山)、陸攻(一式陸攻、銀河)各機種は特攻機

としても使用され、転属者も一部特攻要員になつたと思ひます。

奥本氏は備忘録に基づき事故の状況、殉職者十一名の状況に触れています。白菊の事故について築城空の会同期生が次の文を寄せています。

### 無念の死

神風特別攻撃隊菊水隊

元海軍少尉故荒牧陽三 御厨卓爾を偲ぶ

### 築城空の会同期生

荒牧陽三と御厨卓爾達四十数人(学徒出身)いる築城海軍航空隊では昭和二十年二月、九三中練による特攻編成が行われていた。五艦第十二航空戦隊に所属する神風特攻隊である。

二十年六月五日のことであつた。荒牧、

御厨ら特攻隊員は白菊四機に分乗して第

二鹿屋航空隊まで地形偵察に出かけた。

この頃は本土決戦必至のムードだつた。

この地形偵察も、宮崎海岸または志布志

湾への米軍上陸作戦に備へたものだつた。

白菊の一番機は徳島航空隊の予備士官

が教官として操縦に当たり、この機に荒

牧、御厨ら五人が同乗していた。二番機

には同期の大竹照彦、岩男富好らが出た。

往路は昼間で視界も良く、予定通りの

飛行で第二鹿屋航空隊に無事着いた。第

二鹿屋航空基地は米空軍の攻撃で惨憺たる状態だつた。爆弾で格納庫はつぶされ、

滑走路は爆撃の穴だらけ、穴のない処も砲弾の破片がつきささり、危険この上なしの有様であった。絶えず空襲の危険に晒されていた。司令部は地下壕に退避していた。白菊の四機は燃料を補給すると、急遽その日のうちに、築城航空隊に帰ることになった。

午後六時に帰途についた。航路は真東に五十キロで都井岬、北上して日南、宮崎を経て富高航空隊へ。ここで給油後、国東半島を経て基地の築城航空隊まで三〇キロの航程である。

離陸して志布志湾にかかる頃雲に巻かれた。やむを得ず編隊を解き、それぞれ目的地に向かう形となっていた。

荒牧、御厨のいた一番機には、甲飛十三期予科練出身の下村重一もいた。下村はこの一番機に乗っていて、奇跡的に助かった一人である。

その下村の話によると、その時の模様は、辺りは、一面の雲また雲である。何も見えなかった。

隊長の予備士官から声がかかった。「任せておいて呉れ。後ろで寝ておれ」下村らは、目的地に着くのをじっと待っていた。単純なエンジンの響きが、およそ三時間続いた。突然、操縦室から声がかかった。「おい、砂浜に不時着するぞ。しっかり掴まっておれ」

座席も無いし、体を固定する方法は何も無い。それぞれ機体の両サイドに掴まるしか手がなかった。下村は何故か少しの不安もなかった。じっと時の経つのを待った。それは海岸に不時着するまでの僅かの時間の筈だった。

グワーン！突然、鉄板にでも叩きつけられた様なショックが走った。．．．．．そこで下村の総ての記憶が消えてしまった。一瞬の出来事だった。

どれ程時間が経ったのだろうか．．．下村はブランコに乗ってスゥーと空中に浮いているようなスローモーションで暗闇の中をゆっくり回転している様な感じを受けた。海水をググツと飲み込んでハツと我に帰った。

「ここは海上だ。俺は浮いている」下村は反射的に目を走らせた。灯りが見えた。その灯りに向って必死に泳いだ。どの位の時間をかけ泳いだろうか。十分の様に思える。それとも二〜三時間だったのだろうか。

「助かった」やっと岸にたどり着いた。が、余りの疲れに、もう動くことが出来ない。墜落の時、頭と腰をしたたか打つたらしい。激しい疼痛が走る。うつぶせのまま、十分程過ぎた。やっとうろりと横に一回転した。空は真つ暗闇、星も見えない。

「誰か生きているかも知れない」下村は仰向けのまま声をふりしぼって戦友の名前を呼んだ。同じ飛行機に予科練同期の丸山進、古田哲郎二飛曹もいた。

「まるやまあー．．．ふるたあー．．．」  
「荒牧少尉、御厨少尉．．．」下村は繰り返し繰り返し声をかけた。下村の声は空しく闇の中に吸い込まれていった。ザザーツザーツ聞こえるのは波の音だけである。その波の音も段々かすかすかになっていく。

下村はその後、漁夫の通報で陸軍の守備隊に救助された。下村の時計は九時三十分で止まっていた。離陸してから三時間半経過していた。それなのに何故か離陸した第二鹿屋空から僅か南東五十キロの内ノ浦の沖合だった。又、ほかの三機のうち、夜のうちに無事築城航空隊に着陸したのは一機だけである。一機は枕崎に、大竹の二番機は宮崎北方五十キロの陸軍新田原飛行場に不時着した。

数日後、築城航空隊第一格納庫で海軍葬が行われた。荒牧、御厨ら四人は戦死として処遇された。以上

### 筆者追記

事故の様子が克明に語られ、雲中の計器飛行の練度か？地形が判らず、空間意識失調？事故死は無念でなりません。

九三中練特攻隊の訓練は夜間のみ、灯火管制下、敵の空襲下、被害状況下、精

神的にも、戦時とは言え厳しい状況です。

築城基地五十年史より(其の四)  
神風特別攻撃隊菊水部隊銀河隊出撃之地  
碑建立の経緯

会員 水町博勝

築城基地から唯一特攻隊が出撃した。その碑は飛行場勤務隊のベースオペレーション(飛行場の玄関、他基地から飛来した搭乗員が最初に触れあう場所)の前にある碑です。航空祭の日、人出によりコーナーで囲っていました。

碑の建立の経緯は当時の基地新聞「ついき」に掲載「昭和五十三年九月五日一通の手紙が基地司令(当時久松将補)の手元に届いた。差出人は山口県防府市の永松道子という特攻隊のご遺族であった。その内容は『本年三月鹿屋市主催の特攻隊慰霊祭に参列したところ、弟は築城から出撃したことが判った。出来れば彼の出撃の地に立ち、当時の資料があれば見せて頂き霊を慰めたい』というものであった」

築城基地には当時の資料は何一つ残っていないなかったが、調査の結果『神風特別攻撃隊菊水部隊銀河隊』は太平洋戦争も末期に近づいた昭和二十年三月十八日大分から一機、鹿屋から二機、築城から六機が午前六時三十分離陸宇野篤海軍大尉指揮のもと、九州東方の機動部隊に対し

黎明特攻(爆撃)を実施、米空母群に多大の損害を与えたが、未帰還八機を出した。そして松永道子さんの弟松永輝郎海軍大尉は築城を発進した銀河隊六機が発進し五機が未帰還となり、松永大尉以下十五名が南方洋上に散華した、ということが判明した。そして、ご遺族を始め基地隊

員の協力を得て十五勇士を顕彰して「神風特別攻撃隊出撃の地碑」が昭和五十四年三月十七日ベースオペレーションの脇に建立され、厳粛にしかも盛大に除幕式が行われた」と記事があった。

「昭和二十年三月十八日未明海軍攻撃隊第二六二飛行隊 銀河十一型五機は築城飛行場を離陸し九州南方海上敵機動部隊体当たり攻撃を敢行した赫々たる戦果をあげた茲に国難に殉じた十五名の若き空の戦士を顕彰し末永くその名をとどめる」と記されています。

ご遺族の一通の手紙があつてこの碑があります。そして私が碑の前で感銘を受けたことがあります。OBになって築城基地航空祭を訪れた際、私の三期先輩佐藤守氏(築城基地元F186F飛行隊)は、観客の方に「此の碑の前から特攻機が飛び立った。日本の危機に際し、体当たり攻撃を自ら志願し、若い特攻壮士がいた・・・」と、語り部となつて解り易く説明されていた事でした。

銀河隊の関係者がこの基地に誰もいない事でしたが、戦後基地の職員になって、五十年史に松永隊長を見送った回顧を寄せました。



## 銀河機の特別攻撃隊を回顧して

元整備隊員元防衛庁技官 秋吉久米

祖国日本の勝利をひたすら念じながら、命がけで戦った当時の模様について、出撃準備と松永大尉以下十五勇士を見送った一人として、この一文を捧げ御冥福を心からお祈りしたい。

本年は松永輝郎大尉殿の五十回忌に当たるといふことは、十五柱の英霊がその真実を伝えることを小生に求められていることと思ひ走馬灯のように過ぎ去った五十年前の一日の出来事を断片的に整理してみた。

戦局は我に厳しく、本土決戦の様相を呈するようになった昭和十九年の末頃から、神風特別攻撃隊菊水部隊の航空機の尾翼に『二六二』の文字が見られた。これが特攻機隊・銀河隊である(当時、この銀河双発機は、中距離爆撃機としては世界最優秀機といわれていた)。

『二六二』の由来について簡単に述べる。昭和十九年二月四日、第一機動艦隊は、戦艦大和、武蔵に守られた空母九隻、艦艇約五十隻が呉軍港を出港、南方に転戦したが、サイパン戦などにおいては、我に利あらず、内地に帰還した。その中の第一航空戦隊、三番艦、瑞鶴に乗り組む艦上攻撃機天山二十四機を指揮する小野少佐の一隊は、夜間でも空母に着艦でき

る当時としては優秀なパイロット達であった。その後天山隊は陸上勤務となり、六〇一空勲隊の中の二〇二隊として、天山

二十四機を保有し、宮崎県赤江基地に温存されたが、台湾沖海戦で隊長機以下十八機が未帰還となり、照明隊六機のみが帰還した。その六機を基幹として銀河攻撃隊の編成を命ぜられて厚木基地で部隊の編成を完了。続いて豊橋基地で猛訓練を重ね、急降下の出来る部隊となった。二十機は赤江基地に帰ったが、全盛期には四十機以上を擁した時期もあった。そして先人の偉業を偲ぶかのように以降、銀河機の尾翼に二六二の文字が大書されるようになったのである。これが銀河攻撃隊の始まりで、昭和二十年の初め頃からは特攻部隊に改編されていた。そして彼等の死闘は日夜激しく繰り返された。緊迫の度はいよいよ激しく、戦局が一日と我方に不利となる中で、敵空母は本土にしばしば接近、艦載機の来襲が幾度かあった。二十年三月の中頃だったと記憶する。鹿屋の司令部から二六二隊の半数は築城に避難せよとの命令を受け、松永大尉を長とする一隊(多分十五機だったと思う)が、築城基地にお世話になった。航空機は松原地区の掩体壕に入れて整備作業に専念した。松原地区も今より広く、松の木も大きく茂っており、松の

木を切つては誘導路のカモフラージュをしたものである。

## 『特攻出撃』

それは三月十七日の夕刻であった。突然整備分隊長真田大尉を通じて分遣隊長・松永大尉から「明朝、特攻六機を用意してくれ、爆装二五〇キログラム二個・出撃時刻〇五三〇」との命令を受けた。出撃に万全を期するため、我々整備員は午前三時起床、特攻機の前に整列、直ちに作業開始、午前五時予備機と共に七機を滑走路横に待機させ、出撃準備を完了した。出撃命令が来たのは、それから大分時間が経つてからであった。辺りは段々明るくなり、我々は気を揉んだ。多分、敵空母の所在確認に手間取ったであろう。我々は六機の出撃を見送った。松永大尉は、搭乗する直前に、私達の手を一人一人握って、「大変世話になった!後を頼む、行って来ます」という言葉を残して発進した。これが松永大尉との永久の別れとなった。我々は大急ぎで予備機を掩体に入れ成果を待った。十日おきぐらいに特攻機を送り出す吾々にも、何故かこの日の出撃は深く印象に残った。戦況は手に取る如く分るのである。

## 「突入姿勢に入る」

と、電信員が長一声を連送する。その日敵艦隊に与えた戦果は甚大であった。折



しも一機の銀河機が着陸姿勢に入り緊急着陸した。被弾のため滑走路を外れ草むらに車輪をめり込ませ左に大きく傾いて止まった。ほっとした。爆装員が爆弾を外すまで我々は遠くで見守っていた。それで我が方の損害は五機であった。私は特攻機整備員として終戦まで約二百機に近い銀河機を戦場に送ったが、この一駒がまざまざと記憶に残っているというこ

とは松永大尉が派遣隊長として、我々整備員との連絡を絶えず密にした事と、松永大尉の日頃からの人格の然らしめた所以であると思う。当日の午前九時頃、グラマン十七機の来襲を受けて、第四格納庫前の練習機、九六式陸攻などはことごとく炎上したが、大きく傾いた銀河機は激しい機銃掃射でもとうとう炎上しなかった。午前十時頃宮崎より隊長黒丸大尉が心配して単機で激励に来てくれたが、松永大尉以下十五名の戦死を報告した当時が想い出され感無量である。この出撃が、築城からの特攻としては最初で、最後であった。

私も老境に入り、仏に手を合わせお寺にお参りする様になったが、あの松永大尉が出撃の際の「行って来ます」の言葉の意味が漸く分かり始めたような気がする。魂魄は故郷に帰り、永遠に祖国を守る。

り、我が民族の発展を乞い願うとの意味であろうと思う。

### 秋吉氏略歴

昭和八年 佐世保海兵団

十年 第三十期高等整備学校

三十年 航空自衛隊(築城基地)

### 筆者追記

銀河は一式陸攻の後継機として開発された。

一式陸攻の搭乗員は七名程(操縦者、二名、偵察・機銃操作数名)に対し、銀河は三名(操縦者、偵察員、電信員)と小型軽量化し、航続距離は五、五五五kmと一式陸攻並み、速度は五五五km/時と零戦並みに改良した急降下爆撃機である。

築城基地における新鋭機銀河は、岡本氏らの徴用工が作成した掩体壕に、秋吉氏らの整備員が格納し、出撃を待った。

昭和二十年三月十八日の九州南方米機動部隊に対する特攻攻撃の記録は、菊水部隊銀河隊鹿屋二機、大分一機、築城五機、菊水部隊彗星隊第一国分彗星十四機、第二国分彗星四機、零戦直掩第一国分四機、第二国分二機が攻撃(未帰還)となった。

戦果は(米国資料)空母「ヨークタウン」「エンタープライズ」「イントレピッド」に損傷を与えた。



陸上攻撃機「銀河」

## 第二八戦隊及び基地第二八大隊戦闘経過 会 員 中 溝 二 郎

海上挺進第二八戦隊は、昭和十九年九月九日宇品に集合し、十月二十八日に暁第一九七六七部隊と称して編成になった。

戦隊長は陸士五二期の本間俊夫大尉（十二月に少佐になる）、第一中隊長は榎本晴次中尉（幹候八期）、第二中隊長は麻布清之少尉（幹候九期）、第三中隊長は小林浩三少尉（陸士五七期）、群長は豊橋第一予備士官学校出身幹候一期の見習士官で、隊員は志願による現役下士官と、下士候補者の兵で構成されていたが、この戦隊は下士候補者でも、最も

年令の若い者が多く、大正十三年生れ九名、大正十四年生れ五名がいた。

九月以降十二月まで、幸ノ浦の第一〇教育隊で訓練を実施し、昭和二十年の一月十五日から二月上旬にかけて、各中隊ごとに鹿児島港から乗船し、一度長崎に移動して船団編成をしたあと沖縄に向い、二月中旬に至って全員の到着をみた。

第一、第二中隊は島尻郡湊川地区に基地を設定し、本部及び第三中隊の一部は那覇に舟艇基地を設定して展開を終わった。

三月二十四日になると、米艦船群と艦

上機群が湊川にも激しく砲爆撃を開始し、上陸用舟艇が陸地近くまで接近するなどの、上陸の陽動作戦を行なったので、同日以後戦隊は出撃態勢に入っていたところ、二十七日に爆雷の爆発事故が発生し、竹内見習士官以下防衛隊員を含めて十四名が爆死し、舟艇数隻を破損する被害を蒙った。（戦死者名簿の戦死月日は三月二十九日となっている）

このため三月末には、艦砲による直撃を避け、舟艇の保全を図るため、舟艇を大城に移動させ、又、第三中隊で、一部湊川に残してあったものを、具志頭（グシチャン）に移した。

更に四月下旬に、那覇に置いてあった本部などの艇も豊見城南側の高安に移動させた。

四月二十七日最初の出撃命令を受け、同夜から二十八日朝にかけ、具志頭に残っていた第三中隊長小林少尉の率いる二コ小隊が、中城湾に碇泊する米艦艇に対する出撃を行ない、海上戦死者十一名を出したが、この攻撃による戦果は不明であった。

四月二十八日に第二六戦隊が地上第一線部隊への配転を命ぜられたため、戦隊はその残存の舟艇を引継いだ。

五月三日には、軍の総反攻作戦に、米

軍後方への斬込みのための逆上陸部隊の支援に当たり、戦隊の主力をもって船舶工兵二六連隊の兵士を乗せて嘉手納付近に逆上陸させ、援護活動として一応任務は達成し、効を奏したが、この時に戦隊長本間少佐以下十二名が海上で戦死した。また五月中旬に、川島見習士官以下が、舟艇六隻で嘉手納沖に出撃し、戦死一名を出したが、この戦果も不明とされている。

更に五月二十三日に、第二中隊長の麻生少尉以下舟艇九隻で嘉手納沖及び那覇沖に出撃し、戦果を挙げたとされているが、この出撃での戦死者は三名であった。

五月末になり、軍司令部を始め全軍が摩文仁を中心とする南部への後退に際し、戦隊の生存者は残った舟艇を焼却して、島尻南部に撤退し、六月頃に独立混成四四旅団に配属され、その松山大隊に編入となり、戦隊の鈴木少尉が中隊長となつて、戦隊員を中心に斬込隊を編成し、地上戦闘に加わることとなり、与座、仲座付近に陣地を構えていた。

六月上旬から中旬にかけ、与座、仲座も戦闘地域に入り、この地区での戦闘で残っていた隊員の大半（二十五名）が戦死し、中旬になって生存者は摩文仁及び米須の海岸に後退（この間に十六名戦死



を出す)したが、指揮官の自決等により戦線は混乱したため、二十日に至って部隊は解散のやむなきに至り、以後小人数一組となつて斬込みを実施することになつた。

以後八月までこうした状態であつたが、敗戦時には生存者は、大体大城地区に散在していた。

戦隊の被害は、戦隊長以下将校十五名、下士官七十一名の合計八十六名が戦死した。

海上挺進基地第二八大隊は、暁第六四七七部隊と称し、昭和十九年九月十七日、四国の善通寺西部八六部隊で編成を行ない、大隊長は石井清己大尉であつた。

十月一日、大隊は善通寺を出発して鹿児島に向い、三日から約一カ月鹿児島市内の薬師町にある西田国民学校に宿営し、十一月三日に鹿児島を出航して、六日夜那覇に上陸した。

十一月十四日から島尻郡具志頭、湊川付近で、舟艇秘匿壕及び陸上戦闘用の陣地構築を行なつていたが、昭和二十年に入つて他の大隊と同様に、二月十七日大隊は独立第二八大隊と、二八基地勤務隊に改編した。

二八勤務隊は大野重教中尉が指揮官となり、湊川で第二八戦隊に配属されて残り、主力である独立第二八大隊は、石井大尉の指揮下に山(二四師団)第三四七四部隊(歩兵第二二連隊)に配属されることになつたが、守備配置には変動がなかつた。

以後三月二十三日米艦隊の接近に伴い、甲号戦備の下令を受けて、戦闘状態に入つたが、なお四月下旬までは旅団主力とともに後方陣地に待機軍として存在していた。

四月二十九日に独立第二八大隊は、具

志頭基地から首里に前進し、歩兵第二二連隊の第三大隊に代わつて同連隊に編入され、幸地付近の配置につくことになり第一線に出た。

こうして五月三日の軍の総反撃攻勢に参加することになり、一時は米軍の前線を突破して進撃したが、この戦闘で兵力の三分の二を失つた。

そして攻撃中止の命令により、前の線に帰着した後も、更に幸地付近の守備においても被害を出し、五月十日以降は山三四七四部隊とともに、島尻地区南部に撤退して防備作戦に従事していたが、六月二十日に残存兵力で斬込みを決行し、ほとんど全員が戦死を遂げるに至つた。

次に第二八基地勤務隊は、三月二十三日当時には各一コ小隊が湊川四堅原、具志頭に展開していたが、四月十日に示数、富名腰、具志頭に配置を変更し、五月三日及び四日に行なわれた軍の第二次総反攻には、第二八戦隊の行なつた逆上陸支援のための出撃について、舟艇泛水作業を実施し、十日に主力は独立混成四四旅団の輸送隊に転属(第二六大隊の整備隊と一緒に)されたが、そのうちの一部は湊川に残留して、更に五月下旬までの戦隊の出撃泛水作業を続行していた。

六月四日勤務隊の主力は、独立混成旅

団司令部の直轄戦團中隊に編成替えをし、一部は混成旅団下の部隊に転属された。

その後十三日に仲座付近で米軍との戦闘に当たり、ここで多くの戦死者を出したため、二十日頃には兵力は減少し、戦闘不能の状態となったので、残員を挙げて斬込みを決行したあと、下旬には個別の遊撃戦に移っていたが、各地の戦闘で全滅状態となり、大隊長は八月九日島尻地区で戦死した。

大隊の戦死者は七三二名、生還者は一二〇名であったといわれている。

**第二九戦隊及び基地第二九大隊戦闘経過**

会 員 中溝 二郎

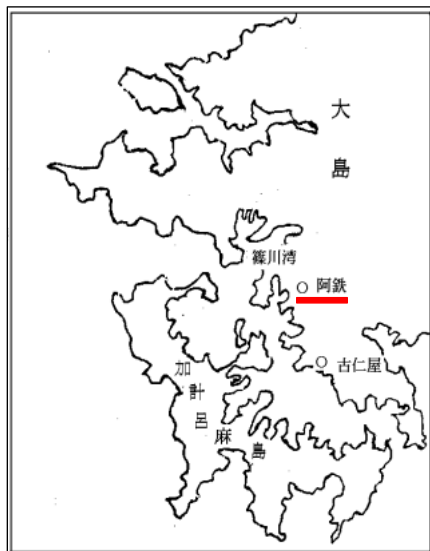
海上挺進第二九戦隊は、暁第一九七六八部隊と称し、昭和十九年十月二十八日、宇品で編成を行なった。

戦隊長は陸士五四期の山本久徳大尉で、第一中隊長は中川康敏中尉(陸士五六期)、第二中隊長は重富正少尉、第三中隊長は相馬光夫少尉(いずれも陸士五七期)、副官は堀俊彦少尉(幹候九期)で群長は豊橋第二予備士官学校出身幹候一期の見習士官、隊員は関東軍より選抜された現役の下士官(乙種幹部候補生を含む)で編成された。

戦隊は第一梯団として第一中隊長中川

中尉が指揮官となり、第一、第三中隊の六十二名と整備中隊の一部が一月十三日宇品を出発した。このうち門司において太田見習士官以下六名と①四十隻(内六隻は、若松港において待機中、火災により焼失した)を機帆船に分乗させ別途輸送として一月二十一日門司を出発し、三月十三日枕崎発、三月二十日頃、口永良部島(くちのえらぶしま)沖で米軍艦上機の空襲を受け、船団の大部分が沈没し、①三十四隻も失うという事故があった。そのため戦隊員の六名は、船舶司令部の命により、残る機帆船二隻で引き返し、その後の新設戦隊に編成替えとされた。しかし中川中尉以下の主力五十六名は門司より陸路鹿児島に至り、ここから②二十隻と共に輸送船によって出発、二月十七日に至って、沖縄本島に到着するこ

とができた。第二梯団は、戦隊長を始め本部及び第一、第二中隊と、整備中隊の主力で戦隊員四十二名③四十隻は一月十八日機帆船七隻(後日山川港において、爆雷積載の一隻が加わり八隻となる)に分乗して宇品を出発したが、途中二月二十四、二十五日の暴風に遭遇機帆船二隻が漂流する(後日一隻は本隊に合流)等の事故があったが、二月二十七日奄美大島名瀬に入港、三月一日同港を出港したが、港外において米軍機の空襲を受け、対空戦闘を行う。三月十五日に奄美大島の古仁屋港に入港、ここでも米艦上機群の空襲を受けた。また、既に沖縄とは連絡がとれず、四月には沖縄戦が本格化し同島への航行は不能となり、やむなく以後は同島の阿鉄に基地を設定し、海軍の震洋隊と共同作戦に入り、そこで待機中に敗戦を迎えた。



沖縄本島に到着した前記の第一、第三中隊は、那覇の北東二一キロの北谷(チャタン)近くに配備されていたが、北谷西方の慶良間海面に在る米船団に対し、中川中尉以下十七名(④十六隻)は三月二十九日二十時三十分頃より泛水、出撃した。突入決行は三十日未明、中型船一隻の撃沈を始め、船種不詳船二隻を撃破と

報告された。又、出撃者中一名だけ生還し、他は全員海上戦死を遂げた。

この出撃に対する米軍側の資料として「米海軍作戦年誌」には「四月一日上陸用輸送船ビンズデールが特攻艇により大損害を受けた」としている。これが日米共に二日違いの三月三十日に行つた第二九戦隊の行つた攻撃によるものであらうと思われる。

以後戦隊は第二六戦隊長足立大尉の指揮下に入つていた。

五月三日の軍の総反攻に際しては、船舶工兵二六連隊と行動をともし、三日から四日にかけて西海岸への逆上陸支援を行なつたが、このとき五名が戦死した。以後、残存者は第三中隊長の相馬少尉が引率して、山部隊(二四師団)船舶工兵二六大隊に属し陸上戦闘に加わり、五月二十五日与那原西側の宮城付近での戦闘で二十九名が戦死した。

五月末からの軍の南部への撤退により、残存者は摩文仁に後退したが、六月二十二日に同地で三名が戦死し、全滅状態になつた。

戦隊の戦死は、将校七名、下士官四十八名の合計五十五名であり、あと半数は奄美大島及び宇品で生存したことは、前記のとおりである。

海上挺進基地第二九大隊は、暁一五〇六六部隊として、昭和十九年九月十七日、広島西部第二部隊及び久留米留守五六師団で編成を行なつた。

大隊長は中元勇大尉で、隊の集結後十月三日に鹿児島指宿町に移動し、同町に宿営していたが、十月二十八日に鹿児島

島に移り、十一月三日同港を出航して七日那覇港に上陸した。

十二月中旬に、中頭郡北谷村に移動して、戦隊の海上挺進基地を設定していたが、昭和二十年二月十六日に軍命令によつて、他大隊と同じように、隊を独立第二九大隊と第二九勤務隊に改め、本隊の第二九大隊は中元大隊長が約七〇〇名を指揮し、本部として約一〇〇名(略称フジ隊)、第一中隊は三浦中尉が約二〇〇名(略称タカ隊)、第二中隊は野田中尉以下約二〇〇名(略称シマ隊)、第三中隊は梅田中尉の指揮下に約二〇〇名(略称タニ隊)とした。

一方、第二九勤務隊は、現地の防衛召集兵を含めて、水津彦一中尉が約一、〇〇〇名を指揮することになつた。

本隊は二月十九日北谷村を出発して、島尻郡玉城国民学校に移駐し、以後玉城部落で対米上陸作戦の準備を行なつていたが、所属は独立混成四四旅団に属し、四月二十六日には知念支隊(支隊長樋口大佐?)に属していた。

本隊は更に五月七日に山(二四師団)部隊の第三二連隊(連隊長北郷格郎大佐)に転属され、その第二大隊として二九大隊及び二六戦隊の一部、輜重兵二四連隊の一部を編入し、臨時に大隊を編成し、



中元大尉がその指揮をとった。

そして同日から、三二連隊の右翼方面第一線部隊として配置につき、八日に幸地付近で米軍との戦闘に当たった。

十四日には独立速射砲第三大隊（大隊長一法師鉄男中佐）とともに、戦車第二七連隊（連隊長村上乙中佐）に編入され、十五日はまた歩兵三二連隊に帰り、一三〇高地正面で連隊の行なっている戦闘を支援するよう命令を受け、十六日から配備された。

しかし十八日に米軍の戦車による背後からの攻撃を受け、危急状態に陥ったが、洞くつにとじこめられながらも戦闘を継続し、二十日に同地からの撤退命令を受けて、敵中を脱出し撤退した。

こうした戦闘で、隊の主力はほとんど戦死し、六月二十日には組織的戦闘は不能となった。

なお大隊長は、六月十五日、島尻地区で（六月二十五日、本島南部の国吉との説あり）また勤務隊長の水津中尉は六月十日に、首里の東方弁ヶ嶽で戦死した。

大隊の戦死者は七七三名、生還者は一二名と云われている。

### 第三〇戦隊及び基地第三〇大隊戦闘経過

会 員 中溝 二郎

海上挺進第三〇戦隊は、通称暁第一九七六九部隊と称し、昭和十九年十月二十八日に、他の二一ないし二九の各隊と同じく、軍令陸甲一二〇号に基づいて、宇品で編成を行なった。

戦隊長は陸士五二期の富田稔大尉（十二月に少佐）で、中隊長には面高俊信中尉（陸士五五期で十二月に大尉）、中島巖少尉（幹侯九期）、本郷良勝少尉（陸士五七期）、副官は菅原寛（前橋予備士官学校出身一二期）見習士官で、群長は豊橋第一予備士官学校出身幹侯一二期の見習士官、一般隊員は現役下士官及び兵からなる隊であった。（編成後、兵長・上等兵は全員伍長に進級した）

この戦隊は、本来は第四戦隊と同じく三二軍の所屬として、沖縄の宮古島地域に配置されることになっていた。

しかし幸ノ浦での訓練を終え、宮古に向け内地を出発したのは、昭和二十年の二月に入ってからであった。即ち一月十六日宇品発、陸路鹿児島に至り、二月二十八日に二隻の輸送船（第十一星丸、大信丸）に基地隊の整備中隊と共に分乗、他の輸送船二隻及び護衛艦四隻にて鹿児島

島港を出発した。三月一日海上で、延二三九機に及ぶ米軍艦上機の攻撃を受け、奄美群島の大島郡西方村の篠川湾に退避したが、結局この戦闘で輸送船は全部沈没し、又戦隊の下士官十六名が戦死した。

戦隊はこの戦闘により①艇・弾薬・燃料・食糧等すべての資材を失った。

このため沖縄に向けての進航は不可能となり、三二軍司令官の命により三月九日帰航の途につき、基地大隊の一部とともに海軍の軍艦により大島から引返し、十二日に佐世保に廻航した後、十四日に宇品に帰りついた。

以後は、幸ノ浦で新たに編成される戦隊の教育・訓練の援助を担当することになった。

このため大本営陸軍部では、二十年四月九日になって、正式に第三二軍の編成から除外し、内地防衛用に切替えることにしたが、現地配置されることなく船舶司令部においたため、八月まで宇品において直接戦闘には参加しなかった。

八月六日広島への原爆投下の際には戦隊長以下広島市内に派遣され、終戦前日まで市内の消火・被爆者の救済・死者の処置等の活動を行った。戦隊の被害は前述の通り下士官十六名の戦死であった。

海上挺進基地第三〇大隊は、暁第九七

九〇部隊と称し、戦隊よりひと足先の昭和十九年九月十六日に福岡久留米野砲兵第五六連隊補充隊に於て基地大隊としての編成を行なつた。

大隊長は、少尉候補者一四期の藤倉長太郎少佐であつた。

大隊は十月一日鹿児島に移動し、まず第一中隊が第一陣として十一月十一日に鹿児島港発、十一月十五日宮古島上陸、大隊本部・第二・三中隊は第二陣として十一月十五日鹿児島港発、十一月二十二日宮古島に上陸し、戦隊及び後続部隊のために基地設営作業に従事していた。

しかし、前記のように戦隊は遂に宮古島に到着しなかつたため、隊員は爾後宮古島警備のための陸上兵力に転用され、空襲、艦砲射撃を受けながら、米軍の上陸に備え、八月の敗戦を迎えた。

また戦隊と同じく、二月二十八日に鹿児島を出航した整備中隊は、三月一日、奄美大島の篠川湾において米軍の空襲を受け、これと対空戦闘を行なつていたが六名が戦死した。又乗つていた船舶が沈没したので、戦隊と同様、三月九日に大島から佐世保に廻航、十四日に宇品に着し、敗戦時まで宇品で舟艇の整備と本土防衛のため訓練に従事していた。

同大隊の損害は総員九〇〇名中六十六

名(前記の整備隊員六名を含む)であつた。

### 海上挺進第三〇戦隊の記録

第三〇戦隊長 富田 稔

#### 戦隊編成

昭和十九年九月二十八日

昭和十九年九月

在満各隊より選抜された部隊要員幸ノ浦到着。

戦隊を仮編成して愛知県額田郡挙母町(現 豊田市)のトヨタ自動車工業へ講習に行く。

昭和十九年十月

中隊長要員 面高、江頭中尉、本郷少尉

幸ノ浦へ帰り戦隊編成完結。

第一中隊長 面高 俊信中尉

第二中隊長 中島 巖中尉

第三中隊長 本郷 良勝少尉

江頭中尉は第二一戦隊へ転出後台湾にて戦死。

当時舟艇既に不足し、戦隊は、フォー D V 8 エンジン、他はトヨタ、日産、シボレーのエンジンを以て舟艇を整備せり。訓練用資材同様にて、数回にわたり大阪、名古屋方面へ買い出しを派遣し漸く維持することを得たり。

此の間の宮原主計中尉の資金調達と藤

岡兵技中尉の苦勞は並知れぬものあり。その功は特に勞とするに足る。

宮原主計は、ある時、以前勤務した飛行某部隊の年間の諸費用に相当すると驚いて船舶司令部经理部へも行き辛い様子であつたこともあるが、とにかく出陣準備の絶対要求として気の毒ではあつたが頑張つてもらつた。

昭和十九年十一月十三日

出陣準備完結 戦隊所属の兵は全員伍長に任官せしむ。

部隊全員宇品に至り軍装検査。馬場船舶練習部長、松山第一〇教育隊長を中心に写真を撮影す。

昭和十九年十二月

機帆船により宮古島へ輸送の内示あり。面高大尉を派し艇搭載の研究を行なう。

昭和十九年十二月一日

富田戦隊長少佐に進級。

第一〇教育隊解散し松山中佐、斉藤少佐、甲斐大尉等夫々練習部へ復帰。第三〇戦隊は幸ノ浦で輸送船の到着を待つ。

昭和二十年一月一日

新年を幸ノ浦に迎える。輸送船待てども来たらず。

昭和二十年一月

前進の予定変更となり、汽車輸送に依り鹿児島に前進す。宿泊地を舟艇繋留場

の海岸にされるよう兵端司令部に要求せるも、宿泊地なく舟艇を桜島に面せる海岸に繋留し、第七高等学校体育館を宿营地とす。このことは当地方の兵要地誌の知識皆無なりしたため、後日大失敗の因をなし、戦隊長の責任として悔いを残せり。すなわち鹿児島地方は冬季急に東南の強風吹き出すことあり、その際鹿児島湾の西岸は大荒れとなる、このため一夜に十数隻を沈没せしめ、その修復に多大の労力を要することとなれり。

## 出 戦

昭和二十年二月二十七日

沖繩方面最後の輸送船団（汽船四、護衛駆潜艇四）により前進の命を受く。

乗船区処

● 第一一星丸（山下汽船、貨物船二〇〇トン）戦隊長、第一中隊長、本部付菅原見習士官、各中隊より見習士官各一名、下士官若干、舟艇爆雷、燃料全数。  
● 大信丸（貨客船）戦隊の残余全員、整備中隊全員。

星丸は陸地構築用ダイナマイト五〇〇トンを積載しあり。その上に戦隊の爆雷、ガソリン、アルコール、①艇を積載し極めて危険度高く、上記の乗船区分とせり。同日舟艇の七〇%程度積載を完了せるものと記憶す、然るに同夜突然例の東南

風来襲し、舟艇相当数沈没浸水せしむ。（前述）

昭和二十年二月二十八日舟艇の引き上げ及び搭載完了。

舟艇多数破損の件につき、船舶司令官にお詫びの電報と隷下を離るる旨発信。

夕刻鹿児島港出港。戦隊は鹿児島出港と共に沖繩軍司令官の隷下に入る。

船団の予定航行計画

当時既に米機動部隊近海にあり、ために夜間航行となれり。

同年二月二十八日晚 鹿児島出港

三月 一日朝 奄美大島湾内に仮泊

同夜 同上出発

三月 二日朝 沖繩本島到着揚陸

同夜 同上出発

三月 三日朝 宮古島到着揚陸

## 奄美大島海峡における戦闘

昭和二十年二月二十八日夜、対潜監視のため面高大尉以下不眠にて警戒航行す。無事なり。若干の潜水艦情報有りたる模様。

昭和二十年三月一日 大島海峡に入らんとする頃、夜が白みたり。戦隊長は前夜は勤務を面高大尉以下に一任し熟睡せるを以て、早朝より船橋操舵室に位置す。前夜監視業務に服せし者は船室にて仮眠中なり。

航行の順序は護衛指揮艇友鶴を先頭に星丸、大信丸、外二隻の隊列を以て水道を航行す。友鶴より「敵機に注意せよ」の旗信号あり。注意信号にてさして気に止めざりしところ頭上に爆音あり。船橋側へ出て仰ぎ見るに一群の敵機頭上において急降下銃爆撃を開始し、敵弾は盛んに船橋屋根を貫き船砲隊は此れに対し応戦を開始せり。従来の戦例より、また星丸の船荷（危険物品のみ）よりして到底無事なるを得ざること明白なるを以て、人員為し得れば舟艇の安全を第一と決心、船長に相談す。船長同意見にて極力急降下爆撃困難なるよう湾内深く進入し、状況に依つては船を掘坐せしめることとす。

船長五条氏は海没三回、一等航海士某氏は九回の経験ある熟練者なり。船長の熟達せる操船により篠川湾最奥部へ達することを得たり。此の間の船長の操船は後に友鶴の艇長の絶賛を受けたり。

星丸への攻撃中断せるを以て、其の後の処置をすべく甲板へ降りる。ふと見るに大信丸は篠川湾中央部に停止し、敵機はこれに集中攻撃を加えあり。弾幕は曳光弾を交えて正に幕の名の如く同船を蔽いあり。忽ち爆弾一発同船の最中央部に爆発し、大信丸は前後真つ二つになり船首尾を夫々上にして轟沈せり。此の間僅



か数秒間と覚ゆ。

気が付けば星丸甲板上は①艇火災を生じ戦隊乗員はその消火に懸命にして、且星丸後部の機関室も爆撃のため火災を生じありたり。②艇の火災は漸くにして鎮静す。

敵機の攻撃の間を利用し、泛水を開始す。双眼鏡を以て浮遊せる大信丸乗員の状況を視察す。特に戦隊員の救命胴衣は一般と異なるを以て注意せるも見分けることを得ず。漸く五隻を乏水し、うち二艇可動せるを以て、面高大尉を以て大信丸乗員の救助に赴かしむ。戦隊長はその後の離船の時期を誤らざるよう船長に依頼、且戦隊員に命じ連絡のため離船上陸す。菅原見習士官を帯同す。

篠川地内に通信所あり。ここより沖繩軍司令部へ状況を打電す。星丸へ帰らんとするも、海岸に到ると敵機銃撃し来るを以て海岸遮蔽地にて同船の状況を見る。

戦隊員は勇敢にその間を可動の一隻を以て重要書類、貨物等を運搬しあり。機関部の火災は益々盛んとなり、戦隊員及び船長以下乗員は遂に退避す。船舶高射砲分隊は殆ど壊滅せり。戦隊員全員無事なり。沖繩軍より返電あり。命令に曰く「一兵と雖も前進すべし」と。

大信丸乗船者の状況は全く不明なり。

薄暮に至り古仁屋警備司令部に連絡に赴

かんと菅原見習士官と共に①一隻に乗り出発す。海軍大発と遭う。古仁屋より連絡に出来るものなり。その指揮者某大尉に状況を告げ、特に星丸は恐らく爆発するを以て十分注意するよう伝達せり。既に闇となり、沖へ出るにエンジン故障となる。手漕ぎをしながら修理せんとするも不能。帰還を決心し時々始動するエンジンと手漕ぎに頼りつつ星丸を目標に前進す。星丸突如大爆発を起こし数十メートルの火柱が上がる。辛苦せる②艇全部無為となれり。海岸に達するに先に遭遇せる海軍大尉はその爆発により戦死しあり、運命なる哉。

これより先護衛の労を謝するため友鶴を訪う。護衛隊は友鶴以外の三艇全部沈没し悲壮なり。艇長麦酒を持ち出し来れるも厚く之を辞す。

各地に漂流せる戦隊員の集結を図る。数日間を要す。この間篠川部落に宿営せり、星丸は船底及びマスト一本を浅瀬に残すのみにて他は大小の鉄板となりて四散す。相当距離の処に畳程の鉄板飛来しあり。星丸船員も暫く共に生活す。機関部員等に若干の戦死者あり。

戦隊及び整備隊は大信丸と共に二二名運命を共にせり。

#### 沖繩軍司令部へ

昭和二十年三月七日頃古仁屋に移動し事後の処理に対策せるも前進の方法無し。船舶司令部より、「第三〇戦隊は再編成のため帰還すべし」との命あり。然れども部隊は鹿児島出港と同時に沖繩軍司令官の指揮下にあるを以て簡単に服命するを得ず。ここに於いて「一兵と雖も」の命に対し責任を果たさんと決意し、何とか沖繩軍司令部へ到るべく方法を考えたり。

昭和二十年三月九日夜、徳之島への連絡用小漁船に便乗し出発す。先ず徳之島に至りここより為し得れば飛行機を利用せんとするものなり。野中少尉、菅原見習士官帯同す。

(注) 野中少尉：基地大隊所属であるが、第三十戦隊の戦歴人事の記録係として戦隊と同行していた)

昭和二十年三月十日朝、徳之島へ到着す。海岸に於いて旧知の中溝中佐に偶会す。中溝中佐は当時徳之島警備部隊の参謀にてこの人に会いたるは誠に幸いなり。事情を話したる処、即時、今日連絡用飛行機来るを以て利用することを得との決を得たり。但し人員は二名とのことにて菅原見習士官を同地に残すの已むなきに至る。古仁屋の面高大尉より来電あり、

則ち「古仁屋警備司令部より同日出港予定の某艦により内地へ出発の区処ありたるも如何」と。今は兵員を沖繩に輸送する方法も無くその命に従うべく返電す。恐らくこれが最後の戦隊への命令下達ならんと決別の感深し。

昼頃到着せる飛行機(旧式の偵察機)にて野中少尉と共に出発す。数日前、同空域にて連絡機敵機に撃墜せられたる故注意を要することにて、機影に注意しつつ飛行し無事那覇飛行場へ到着す。直ちに軍司令部へ至り軍司令官牛島中将に申告、状況を報告す。軍司令官より命を受く。曰く「よく来てくれた。今は一人でも欲しい時機であるが、船舶司令官より第三〇戦隊を帰還させて欲しいとの事ゆえ貴官は即時内地へ出発せよ、内地防衛を頼む」

軍司令部に菓丸少佐あり。陸士当時の本科区隊長(他中隊)にて面識あり。又同期の長野少佐参謀として勤務しあり。長野少佐万端の世話を引き受け、明朝の飛行機便を利用し得るよう手配してくれた。

同日海上挺進戦隊の兵棋演習催されあり。同期の岡部(二七)本間(二八)各戦隊長と共に兵棋演習に参加す。二九戦隊(山本大尉)は未着の様なり。同夜

同期生会を催し私の送別会ともなれり。歩兵大隊長として鶴屋少佐もあり。他二、三名あるも残念ながら氏名忘れたり。広島へ帰還す

昭和二十年三月十一日朝、空港発、菅原見習士官は掌握することを得ず。

福岡雁ノ巣飛行場へ着陸す。この間沖繩出發後三〇分にして沖繩飛行場來襲を受けたる旨機中にて承知す。

これまた運命なり。雁ノ巣飛行場は昭和十八年一月ビルマより帰還せるとき着陸せし処なり、感深し。野中少尉福岡県なるを以て自宅へ寄らしめ独り広島へ向かう。

昭和二十年三月十二日、船舶司令部へ出頭し報告す。船舶参謀(坂少佐と記憶)より指示あり。「第三〇戦隊は新たに編成する船舶司令官直轄三ヶ戦隊の教育を担当し且その基幹たるべし。貴官は速やかに江田島幸ノ浦へ至りその準備をすべし」と。

戦隊主力は何処へ行けるか消息不明なり。以後到着を待ちながら毎日司令部へ行く。

昭和二十年三月某日、数日して漸く戦隊兵員到着す。その遅れたるは軍艦とは雖も日露戦争当時の三本煙突のものにて、且潜水艦情報頻りにして遠く大陸沿いに

航行したるためなりとのことなり。

菅原見習士官も帰來せり。彼は翌日沖繩へ到着せるも戦隊長既に出発せりとのことにて処置なく、また飛行機座席獲得の見込みなく、遂に乗員(同期見習士官)と同乗することを得、帰還することを得たるものなり、安堵す。

昭和二十年三月某日、幸ノ浦へ至り準備に着手す。先に三ヶ戦隊の予定が三〇ヶ戦隊に変更さる。任重大に過ぐるため速やかに齊藤少佐外前第一〇教育隊の首脳を以て教育隊を再編さるるよう司令部へ意見具申す。

舟艇資材極めて少なきも、ぼつぼつ支給の物を以て整備に着手す。

昭和二十年四月某日、第一〇教育隊長として小倉中佐、また主任として齊藤少佐着任す。

齊藤少佐によるその間の経緯。

齊藤少佐は十二月幸ノ浦を離れ暫く練習部にあり。一月陸軍省に転補。三月十日以来東京空襲激しく。沖繩の戦況は逐次不利となり、中央に於いては本土決戦のため中央諸機関を縮小することとなり陸軍省も僅かを残して第一線に出ることとなった。その頃宇品より私を返せとの要求があったことを知り強く希望して広島へ帰つたとのこと。

此の頃練習用資材既に底をつき、与えられたる舟艇二〇隻くらいにして、そのエンジンには米、英、仏、日等各国を網羅し十数種あり、整備隊佐々木大尉、藤岡中尉、隊員及び戦隊員寝食を忘れて整備に専念す、これを以て爾後の教育に支障なからしめたるは功絶大なり。

教育隊長小倉中佐←万波大佐←斎藤少佐と代わる。

昭和二十年七月某日 姫路第一〇研究所（船舶）に研究出張す。室津に於いて研究中の新艇及び新兵器の実験あり。舟艇はやや大型となりたるのみにて見るべきものなし。潜水特攻艇の能力も用とするに足らず。軽魚雷の如きは方向をそれたり浮上早すぎる等実用に程遠し。

実戦部隊としての意見を問われたるに由り次の希望を述べたり。

我々の作戦する時期は間近であると思ふ。本日の展示品に於いては早急に間に合うものがない、然も数量的に見込みの無いというに至っては余りにも戦況から離れすぎている。従つて実戦部隊としては先ず戦機に間に合う数量が欲しい。今更性能の新奇を求めるものではない。次に速度が欲しい。我々の任務達成はとにかく敵船迄到着できなければ完遂することはできないものである。敵の警戒網を突破するに今なしうることは速度のみで

ある。音はいくら大きくてもよいからとにかく速い舟艇が欲しい。要求は夫だけである。

当時訓練を終わり逐次出戦した第三一戦隊以降に於いて、出発時与えられたる舟艇は極めて数少なく、某時期以後は皆無にして現地支給となれり。然も殆ど支給されることなく終戦を迎えたる実状なり。

### 昭和二十年八月六日以後

昭和二十年八月六日、此の日快晴なり前日日曜日のため、教育隊長斎藤少佐他、広島に家族ありし者は大部自宅へ帰り、第三〇戦隊長はその代行として前夜来、隊に宿泊しあり。幸ノ浦の広島に面する事務室に海辺を背に窓をあげ執務中なり。突如室内に閃光あり。首筋は焼けるように熱さを感じ大轟音を聞く。

空襲警報、警戒警報共にその若干以前に解除されたところなるを以て、海岸に集積中のガソリン爆発と直感し室をとび出すも異常なし。広島に幾条の煙上がり、上空に不思議なる態の雲ありB29一機西南進するを見る。されど未だ爆弾とは思わず、宇品に在りしアセチレン工場爆発ならんと話し合えり。遅れて似島より定期船到着斎藤少佐は練習部に用あり乗船し非ず。

有線通信不能となる。無線一班あり。

第一信を受く

（時刻不詳）

「広島は原因不明の爆発により炎上中なり」

第二信あり

「敵は原子兵器らしきものを使用、広島は炎上中。第一〇教育隊は救援に出動の準備をすべし」と。

「この原子兵器らしき疑義あるも記憶に間違いなきものと確信す。その後の広島市の資料調査にて、その数日前、船舶司令部にて原子兵器についての研究もありたりの実事ありたるとのこと。」

第三信により救援に出発す。則ち第二信により準備せる面高大尉を長とせる戦隊主力を以て第一陣とし、大発により出発せしむ。正午頃と記憶す。

その後教育隊の区処をし、①により追及す。教育隊長と何時何処にて遭いたるか記憶なきも、多分教育隊長到着せるを以て広島へ向かいたるならん。

広島電鉄本社に位置し、作業を開始せる面高大尉に会う。

「当時あれ程の事はないと思つて電鉄本社へ到着したときに面高君と五、六千人くらいの死傷者かなどと話し合ったことを記憶している、というものの五、六千人といえれば歩兵の戦時二個聯隊に相当するものでこれは大変だと思つた。」

第一日の作業で戦隊のみにて收容せるもの約八千、事の重大さに驚く。

昭和二十年八月七日、斎藤少佐の指揮により、訓練中の各戦隊逐次救援に到着し、また近辺の船舶工兵隊も到着河中の死者の收容、及び負傷者を似島へ転送す。漸く船舶司令官統一指揮の下に担当区域設定せらる。戦隊は逐次北上し元安川左岸(東)地区を担当、露営を以て作業に当たる。死者は多く泉邸に輸送し、茶毘に付す。教育隊長は幸ノ浦の区処もあり、戦隊の指揮は概ね面高大尉に委かせ、教育隊全般の作業を見る。

乗用車一輛を拾得。手入れして可動となり連絡用を使用す。のち県庁のものと判明しこれを返す。

日を経るに従い他隊逐次到着、市民活動も緒につき出戦準備中の各戦隊は次第に幸ノ浦に還る。教育隊長も十二日頃基地へ帰還し、残余は第三〇戦隊主力のみとなる。

昭和二十年八月十四日、昼頃急遽帰還命令あり、撤収す。

明日重大放送ある旨示達さる。内容不明、終戦予測し得ず。

昭和二十年八月十五日、朝、終戦詔勅の放送あり。天気晴朗炎暑なり。当に敗戦なり。但し教育隊長の命により静なり。逐次兵器、舟艇を処理す。エンジは海岸

に整置し船体は焼却す。苦心して整備したもののなるを以て断腸の感禁ぜざるを得ず。

昭和二十年九月上旬、戦隊を解散し全員帰郷せしむ、残る者斎藤少佐、甲斐大尉と三名のみとなる。

昭和二十年九月十日 最後の処理を斎藤少佐、甲斐大尉に委ね幸ノ浦を出発す。月末頃船舶司令部へ出頭の命を受く。

昭和二十年九月三十日、台風にて切断されたる山陽線を徒歩にて中継し司令部へ至る。具体的命令なし、只帰郷後命を待てとのことにて本日に至る。

## 後記

歩兵部隊に育ち歩兵部隊で戦闘に従事した私が、突然特殊編成の部隊に転じ随分と迷いました、然もいわゆる特攻部隊で、どういう態度で臨んだがよいかもこれという確信がありませんでした。私自身悟りを開いた人間でなく、只数回死線をさまよった経験だけで、いささか運命論者的平静でありました。原隊を離れて東京に勤務しながら毎日ビルマの母隊の戦況に注意し、一日も早く大隊長として母隊へ行きたいと思っておりました。その母隊も昭和十九年七月末、ミートキーナで俗にいう全滅となり、今は空しく翌九月挺進隊長として転出致しました。船舶司令部付という名目で、何をするのか

分かりませんでした。行く前は多分南方方面の船舶部隊要員だろうということ、司令部へ到着して初めて挺進隊長要員ということでした。

先ず初めに考えたのは特攻部隊要員の精神教育でありましたが、これは自分なりに極めて簡単に解決しました、即ちあえて特攻というような事は取り上げず、軍人はとにかく任務第一に徹底すればよいとしました。従って元来あまりお説教も上手ではありませんので、精神訓話というような事は殆んどせず、その時々々の任務と責任を完遂するということだけで、従って責任をさぼってしなかつた人には随分きつく当たったかと思えますが、その他はなるべく大づかみに終わったようです。

その次は部隊の兵員に何をやってやらよいかということでしたが、部隊長の権限は極めて限られており、まずはその権限内の休暇でも最大限にと思ひました。それで出戦前、幸ノ浦の二回目の訓練の前には全員に休暇を与えました。責任上私一人だけ部隊に残りました。これが今から出動すれば十中八、九生還の見込みの無い人達に対するせめてもの気持ちでもありました。いま一つは戦隊長が何時出撃するか。の時期の考えをまとめる事でした。戦隊全員一斉に出撃するなら

ば簡単ですが、これは当時の戦況としてはあまり予想されないことでした。(これは沖繩方面の二六〇二八戦隊の結果からも証明されます) 逐時出撃すれば真つ先に戦隊長が飛び出して、戦死も或いは壮とするに足りるかも知れませんが、これは責任を全うしたとも言えません。かと言つて出撃の機を失つて多数の部下を戦死させ自分が残るといふことも気持ちに許しませんが、このことだけが誰にいうことも出来ず日夜脳裏を離れなかつたことです。特にシンガポールで、またビルマで多数の部下を失つて一人残る隊長として、いまでも自分の死に場所はどこであつたかと考えざるを得ません。

教育隊に派遣されていた五条中尉(西本願寺広島別院蓮枝、浄専寺住職、当時挺進戦隊員に対する精神教育のため司令部より特に派遣せられていた)が或時「富田さん、貴方は既に沢山の部下を失くされているのだから、せめて阿弥陀經ぐらゐは覚えて下さいよ」と言われた。その言葉によつて下手ながら時々門司の歩兵第一一四聯隊第七中隊慰霊碑と幸ノ浦の海上挺進戦隊慰霊碑の写真とさらに挺進戦隊慰霊碑除幕式にいたいた沖繩海岸の砂(沖繩では私が任官当時の聯隊長中島中将、同期の第二七戦隊長岡部大佐、第二八戦隊長本間大佐、沖繩軍参謀

長野中佐等々また海上挺進戦隊員多数戦死者)を前に阿弥陀經をもつてせめても志としています。またトヨタ実習当時御厄介になり、その後数度にわたり慰霊をして下さつた挙母陽龍寺様にも心から御礼申し上げます。

奄美大島の海に逝つた我が戦隊、整備隊の各員、沖繩の海に散つた各挺進戦隊の諸兄および広島島の原爆に亡くなられた諸霊の安がらんことを祈ります。

昭和五十年一月三十日

元海上挺進第三〇戦隊戦隊長

富田 稔

外地に於ける海上挺進隊

會員 中溝 二郎

大戦末期、第一線部隊も現地の実情に応じ、必死の抵抗を準備していたようである。当時、担当者以外に知らされていなかった各地の準備の概要について説明する。本文は元第一〇教育隊長斎藤義雄少佐(故人)が特幹三期生の絆(船舶特幹第三期生の記録)に寄稿されたものを骨子として、直接これらに拘わられた中尾初男氏(マレー半島)、山本精一氏(香港)の記録を抜粋させていただく。

マレー半島における海上挺進隊

戦局の不利に際し、マレー半島においても空の特攻隊と並んで特攻艇で敵艦船

を攻撃する必要が痛感されるようになった。

当時の第七方面軍参謀栢山徹夫氏、船舶工兵第一〇連隊中尾初男氏の記録を総合して概要を紹介する。

ビルマ作戦の終末が近づくにつれ、マレー半島と、昭南(シンガポール)の直接防衛が必要となつたが、マレー半島の戦力の大半はビルマに転用されて空白に等しく、対策の確立が焦眉の急となつていた。

このような状況下で、①戦の採用が浮かび上がってきた。

その具体化について、軍司令部、船舶輸送司令部、補給廠等で検討した結果、大本營に要求して、①艇の設計図とその製作上の参考事項及び、海上特攻隊の新設運用上の関係資料等を航空便で送付を受けた。

①艇の製作は司令部参謀部兵站課が主導して、船舶部隊、補給廠等で検討を進め、所在の小型漁船造船所で製作された。エンジンは押収自動車のエンジンを使用し、爆雷は英軍要塞の海岸砲用の砲弾から炸薬を摘出してドラム缶に詰めて作成した。

海上特攻隊編成に際して、船舶部隊を建制のまま転用すれば最も近道であつたが、特殊な決死的行動を要求する戦闘を、

無条件に一建制部隊に命ずることは、必ずしも妥当ではないとの見地から、広く一般部隊から志願者を募集し、決死行動を承知している者だけで部隊を編成することになった。志願者は瞬く間に所望数に達したが、本人の気持ちや家庭の事情を加味し、適任者を厳選して編成された。

教育隊長鳴海少佐、教官浜宮少尉（幹候八期）で、四ヶ中隊を編成、第一中隊長伊藤大尉、第二中隊長斧田大尉、第三中隊長安代大尉、第四中隊長野田海軍大尉であった。なお、浜宮氏氏は、昭南転属まで、船舶練習部教導隊付当時幸ノ浦の第一〇教育隊に教育支援のため派遣されたことのある①経験者であった

中隊は指揮班、第一〇第三小隊、整備小隊の編成で、各隊①艇三十六隻、爆雷四十個、人員一二〇名であった。

この四個の中隊は第三船舶司令官の指揮下に置かれた。

昭和二十年七月末には約一〇〇隻分の特攻隊が基礎訓練を終了し、随時展開可能となったが、どの地区に配備されたかは不明である。

以下直接その任に当たった船舶工兵第一〇連隊所属中尾初男氏（幹候八期）の記録を抜粋する。

昭和二十年三月頃より、第二九軍司令部（マレー半島西岸タイピン）において

も、特攻艇の現地才製作と共に、マレー半島に四ヶ中隊の戦隊編成が計画され、

①の研究・訓練が開始された。ポート・セッティン・ハムにある船工第一〇連隊（通称暁九四二部隊）へも二十年三月七十名の基幹要員の転属が命ぜられた。

船工一〇連隊は昭和十七年十二月上海において編成され、当初は第二五軍（スマトラ島ブキチンキ）の指揮下であったが、十九年六月第二九軍の指揮下に入り、本部をマレー半島のポート・セッティン・ハム（現在地名ポート・克蘭）に置き、ビルマ南方のアンダマン諸島、ニコバル諸島から西はジャワ島に及ぶ広大な地域（現在のマラッカ海峡）に展開していた。特攻艇の秘匿訓練基地はシンガポール島の対岸ベンゲランに設けられており、二十年三月ここに中尾少尉以下十四名が教育訓練のため先行した。

陸軍最後の智恵、水上特攻の兵器は、正式名を肉薄攻撃艇、秘匿名が連絡艇で、マルレ又は①と略号で呼ばれた

ベンゲランはマレー半島の東南端で丘の上に海軍の見張り所があり、一般人は総て移住させられており、ひっそりとした棧橋に木製のモーターボートが数十隻繋がれていた。

ここに、陸軍三ヶ中隊・海軍一ヶ中隊の特別教育要員が約百名近く集まった。

教育隊長は鳴海少佐という戦車出身の方であった。

歩兵第二五六連隊（在セレンバン羽生部隊）から同じ三ヶ中隊要員で先着していた安代中尉（後の中隊長）と一緒にであった。

現地製の①には微発した自動車機関が搭載されていたが、フォード、クライスラー、ビュイックと一台毎に性能は変わっていた。変速機を外してクラッチから三枚羽根のスクリュウに直結されていた。勿論逆転は出来ない。当然操作は特別な感覚を要した。

訓練は昼間の基礎教育と、工場の機関教育が終わると、夜間訓練が始まり、二十五ノットの無灯火の艇隊航行、沈船の攻撃と、急速に演練の密度をつめていった。

二十年四月一日タイピンにおいて、残余の主力が参加し、二九軍司令部の営庭で石黒司令官の初の閲兵を受けた。胸には桜のマークが着けられていた。

その後、全員はペナン島へ移り、夜間視力増進（周辺視・暗周応）並びに船酔い防止体操等が行なわれ、やがて密かにそれぞれの任地へ出発したと聞いている。

安代正典大尉が連絡艇第三中隊長となり、訓練も終盤に近づいた頃、昭南で板垣方面軍司令官の前で搭載爆雷の実爆演

習が行われた。

爆雷はニースンの爆薬工場で鹵獲品のカーリット爆薬をドラム缶に詰める作業を隊員も手伝った。不安であったが、云われるままに棒で突き堅めた。発火装置は総て現地考案である。小銃の菓莢で導火索七糧が雷管に取り付けられている。投下七秒後爆発する仕掛けになっている。

ジョホール水道の実験では木製大発が飛び上がって二つに折れたし、地上では山の一角がすっ飛んだ。

二〇〇匁の爆薬の威力は何とか役に立ちそうである。出撃、舷側攻撃、投下、うまく行けば撃沈出来るかも知れない、ささやかな自信が湧いてきた。訓練は終わった。

三船司(第三船舶輸送司令部)で新しい艇を受領した。新しい任地タナメラは英軍上陸予想地点ポート・ディクソンの近くである。海上機動で帰ることになった。連隊から貰ってきた大発を指揮艇に、小さいポート群を引き連れて、困難な夜間航行を続けながら、マレー半島沿いに北上していった。

バトバハ、マラッカ、ポート・ディクソンと二五〇軒、ポートを連れた初めての航行は何かと難しい。

基地はポート・ディクソンの北、ジマ河の支流を八軒程遡ったところにある。

「タメナラ」と云うところに設定された。先着の本隊が棧橋・繫船場と設営が進められていた。表門には「安代拓殖隊」の隊名が掲げてある。

マレー特攻四〇中隊の企画編成を司令部で担当し、ここが連絡艇第三中隊である。

羽生部隊からも矢頭・前田少尉以下五十名を加え、百二十名の編成が完結した。先着隊がベンゲランで特訓中、本隊の設営も懸命で、河口の漁村ルクトの立ち退き、タンジュントアンの崖淵に設けた。対空対潜監視哨及び電話架設等既に完成し、監視哨からは連日敵機南下の報告が入っていた。

特攻艇は逐次列車で補充され、いずれ四十隻になる筈であった。

空襲に備え、ゴム林に分散して舟艇壕が掘り続けられ、通信班は地下壕の立派な物を仕上げた。

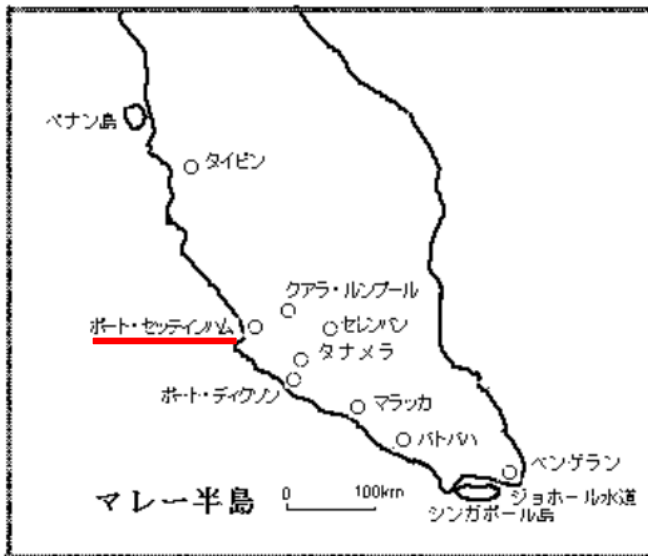
基地の照明や、修理工場、燃料補給の設備等も逐次完備せられた。

第二九軍司令官石黒中将の再度の査閲もあつた。

舟艇訓練は夜間訓練に限った。基地より約八軒下がればマラッカ海峡であった。特攻艇にも部品の不備等があつたが、逐次改善され、整備・訓練を行っていたが、八月十五日列車輸送されてきた特攻

艇を泛水作業中に、終戦を知った。

その後、舟艇焼却等の終戦処理を行い、中隊長以下羽生部隊は陸路を、船工の七十名は大発で海路を、それぞれ原隊へ向かい、抑留作業後復員完了は二十二年十月であつた。



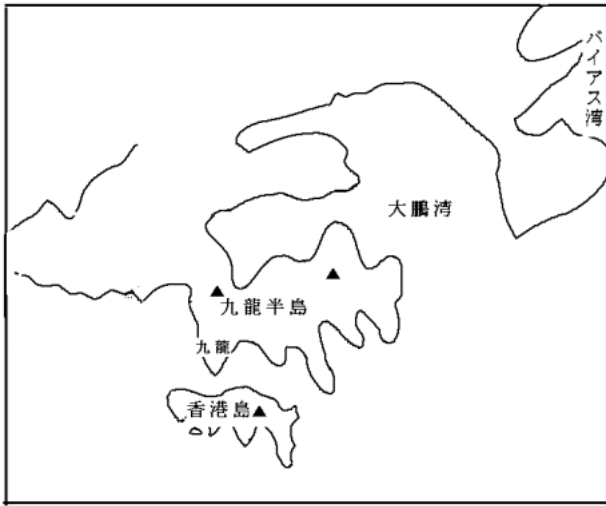
香港における海上挺進隊

香港においても㊦が生産され、訓練されていた事実がある。

香港を中心とする㊧戦準備の全般を紹介する資料がないが、以下山本精一氏(陸士五七期)の行動記録のうちの関係

部分を主体に、全般について推察をする。小豆島の特幹隊第一期生の区隊長であった山本氏は幸ノ浦では第一七戦隊中隊長要員であったが、九月に沼津の船工第二九連隊(暁第一九七八部隊)に転属した。(なお区隊員は第一七戦隊第一中隊員として、比島に配備されて大半は戦死した)

その先遣部隊として、隊員一九九名と大発六隻を伴い昭和二十年一月十八日門司出發二月二日香港着、第二船舶輸送司令部南支部長の指揮下に入った。ここで、大・小発十隻の補充を受けたが、この頃、



九龍造船所では㊦を生産しており、山本氏は内地で㊦の経験者であることから、㊦三十五隻を受領、陸送にて九龍の大鵬湾の入り江に基地をつくり訓練をしていた。

その後、二九連隊の主力は上海にあり、第二船舶輸送司令部上海支部長の指揮下に入り、中支方面の局地輸送に任じ、南支移駐不能につき、五月十五日、先遣隊は、香港在留のまま汕頭(すわとう)船工三四連隊(暁第一九八一部隊)に編入され第二中隊となつて、㊦の訓練を継続し、又、海軍の震洋部隊とも打ち合わせを行っていた。

なお、現地で生産されていた艇は内地建造の㊦と同様の寸法で、ガソリンエンジンであったが、クラッチが無く、エンジンを掛けると直ちにスクリューが微速で回転を始めた。その為、始動して艇隊を組むには、四隻を舫つたまま、中の二隻を始動し、ゆるく動きながらエンジンの調子を整え、その後外側の二隻を始動させ、全艇エンジンの調子が出たところで舫綱を解いて、一列縦隊の艇隊となつた。

爆雷は九龍造船所で米機の不発弾から抜いた火薬を使用して造つていて、自分達の中隊からも作業員を派遣していた。(最終的には百隻くらいの㊦を造つたの

ではないかと思う)

八月一日、第三水上特別攻撃隊要員として、鈴木少尉以下四十七名は㊦と共に転出した。

香港地区ではその他に海上挺進隊が何隊か編成されたものと思われるが、詳細は不明である。

その後、中隊は内地へガソリン輸送をする命令を受け、タンカーの受領準備をしていたが終戦となつた。

八月二十三日第三水上特別攻撃隊の編成が解かれ、鈴木少尉以下四十七名は中隊に復帰した。その後終戦処理作業終了後二十一年六月浦賀に上陸復員した。

### 中支での㊦戦準備

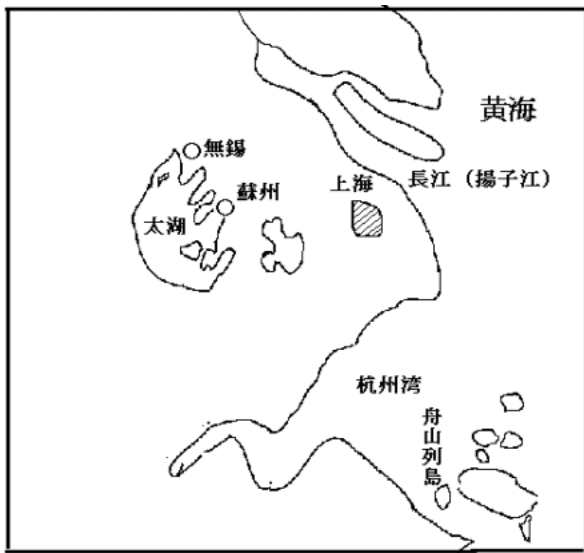
中支の第一三軍司令部と第二船舶輸送司令部が計画したものと思われるが、当時船舶工兵第三三連隊に所属していた荃田嘉男、権田梅芳、深沢清高の諸氏の証言と記録を総合して略記する。

昭和二十年三月頃、㊦艇一隻が内地から上海に送られてきたと云われている。

上海の竜華地区にあった造船所で㊦艇の製作が開始され、昭和島の船舶廠で爆雷投下装置の試作が実施された。爆雷は海軍の対潜水艦用爆雷が準備されたとのことである。

荃田、深沢の両将校と下士官三名は、命を受け朝鮮半島経由、四月二十四日に





幸ノ浦に到着、船舶工兵第二九連隊から派遣されてきた将校二名、下士官三名と共に、既に再開されていた本土決戦のための第一〇教育隊の訓練の流れの中に入って、五月末まで教育を受けて中支に帰隊し、①戦準備の中心となったということである。上海地区での訓練は無錫近郊、太湖河畔の栄江鎮であったと言われ、又、船工三三連隊の海上挺進隊は中支唯一の海上特攻隊で、杭州湾、舟山列島、崇明島等に展開する予定であったとのことである。

②艇の製作は厳重な警戒裡に実施され

たが、その進度は遅々たるもので、訓練にも大きな支障があったといわれている。指導の技術者は日本人であったが、実際の作業員が不慣れな現地人であったことにも原因があったようだと言われている。

### 北海道における①戦準備

外地ではないが、北海道①戦準備について、元船舶工兵第二七連隊長金本康隆氏の証言があるので、以下に略述する。昭和二十年五月頃、船舶司令部から指示があり、②戦準備を決心し、自隊で準備する以外に手段のない状況であったため網走の造船所に②艇の製作を注文した。エンジン入手のため、軍に依頼して将校を東京に派遣し、焼跡にある自動車エンジンを収集して送るよう処置された。

一方、舟艇秘匿壕を船舶輸送司令部が実施し、根室市西南の厚岸郡浜中町霧多布に約十ヶ所の壕が完成した。一ヶ所に②艇三隻を秘匿し、レールを敷いて滑走

汎水するように設備された。訓練は網走湖で実施することにしたが、②艇の製作はエンジンの入手難のため遅

れ、精神教育が重点であった。エンジンの一部が北海道に届いたのは終戦後であったので、①戦の準備は未完

に終わった。

### 本土作戦準備計画と海上挺進戦隊

会 員 中溝 二郎

一、本土防衛態勢の概況と海上挺進隊の配備

日本本土への上陸作戦について、米軍首脳部は、沖縄戦が既に最終段階となった昭和二十年六月十八日に、次の作戦地として同年の十一月一日から「オリンピック作戦」と名づけた九州への進攻作戦の開始を予定し、三、〇三三隻の艦船と、総兵力七十六万七千六百人をこれに使用する計画を決定していた。

この作戦の内容は、陸軍は六〇師団の兵力をもって九州東海岸（宮崎海岸及び有明湾）に、海兵隊は三〇師団をもって九州西海岸（川内海岸、枕崎海岸）に、更に一〇師団は西海岸沖の甌（コシキ）列島に、それぞれ上陸しようとするものであった。

更に本州攻撃は「コロネット作戦」と名付け、翌二十一年三月一日に九十九里海岸から関東平野に上陸し、東京に進攻する予定であった。

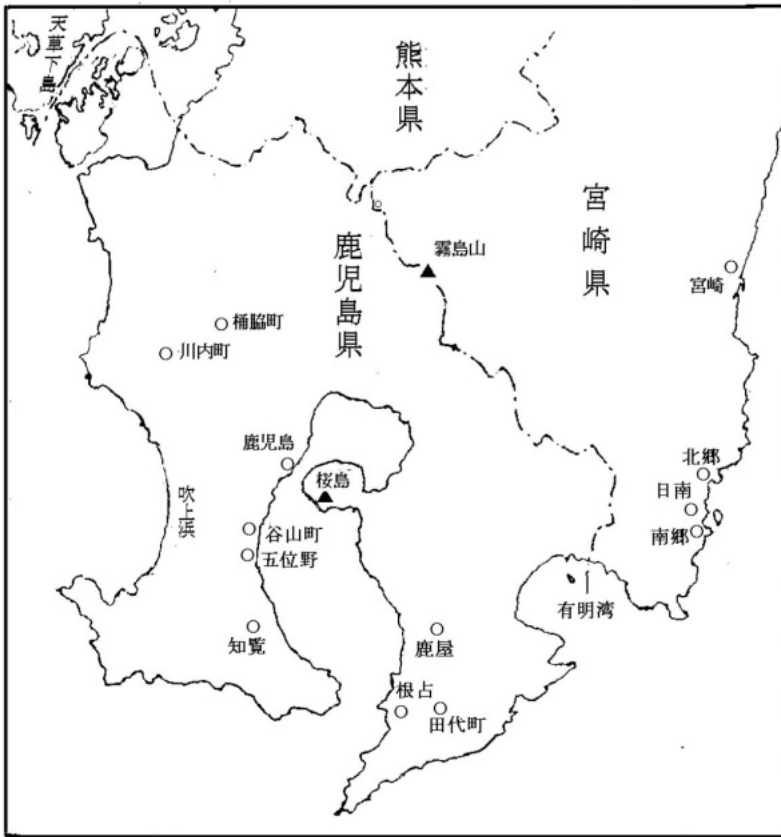
これに対し大本営は、既にレイテ決戦が峠を越した時点で、決戦地は本土であると予定し、ルソン・台湾・沖縄もその前哨防衛戦と考えていた。そして九州・

四国への米軍の上陸は、二十年八月以降であり、関東上陸は九月以降と予定し、上陸地点の予想は結果的には前記の米軍側の計画とほぼ一致していた。この作戦予想により二十年一月二十日に、大本営は「帝国陸海軍作戦大綱」を定め、作戦の重点を関東地方及び九州並びに東海地方におくものとした。

そして四月八日に大本営陸軍部は、この大綱を具体化したものとして、本土作戦準備計画（作戦要綱）を策定した。

ここでその全般にわたって記述することは、この記録の目的を逸脱することになると思われるので、④に關係する地区に限って述べることにし、必要な限りで一般兵力の配備にもふれることにする。

この作戦では、別に記述したような理由で、一旦編成を中断していた④戦隊を復活編成されることになった。これらは主として九州と四国に配備されることになっていったが、九州は第一六方面軍（司令官は福岡におき、司令官は横山勇中将）の守備範囲に属し、その方面軍下に第五六、第五七、第四〇（これは初めは台湾南部に創設されたが、後に軍司令部だけ九州に移動した）各軍を置き、これに属する合計一四〇師団をもって防備することになった。



米軍の上陸が予想される地域の正面には、有明湾に第八六師団を、宮崎海岸には第一五四、第一五六、第二一二の三師団を、薩摩半島には第七七、第一四六、第二〇六、第三〇三の四師団を配置した。

建制としては、航空は海軍が、地上軍

は陸軍の指揮官がこれを統一的に指揮することとし、この防衛作戦でとる攻撃の主目標は、米軍輸送船と上陸用舟艇とし、陸海空の総力をあげて肉弾攻撃を行なつて、これらを極力海上で撃滅することとし、その見透しとしては特攻機及び特攻艇により輸送船団の約四分の一を洋上で沈め、泊地と水際の攻撃で約四分の一を撃滅し、残りの半分を地上でせん滅するという計算であった。

このため予想される米上陸船団の泊地の外側周辺に、小型潜水艦、特攻艇をできるだけ集中配備させることとし、米軍船団の第一次が到着した時期から約十日の間、航空の全部と特攻艇の大部分で、集中的に反覆攻撃を執行することとされた。

そしてこれに用

いる特攻兵力は、飛行機の総数一、八七五機、同じく特攻艇については、陸軍の①と海軍の震洋とで合計二、〇五七隻と、海軍のもつ水中特攻艇四四一隻を計画していた。

( 暁第一九八五二部隊 戦隊長 梅田 恒男大尉 )  
北部九州地域 ( 福岡県 ) では、  
第三三戦隊  
福岡県糸島郡前原町長糸海岸

第四〇戦隊 和歌山県有田郡湯浅町・  
広村海岸  
( 暁第一九八五五部隊 戦隊長 森 本 正二大尉 )

このため前記の予想される上陸地の正面地域には陸海軍とも特攻艇を集中的に配備したが、陸軍の①についてみると、昭和二十年八月段階では、鹿児島県下、  
第三一戦隊  
鹿児島県肝属郡小根占 田代村海岸

( 暁第一九八四八部隊 戦隊長 坂口 景美大尉 )  
第三四戦隊  
福岡県折尾市及び若松市脇田海岸  
( 暁第一九八四九部隊 戦隊長 西山 定大尉 )  
特設第五一戦隊 福岡県博多今津浜海岸

( 暁第一九八四六部隊 戦隊長 田中 外三郎大尉 )  
第三五戦隊  
鹿児島県鹿児島郡谷山町五位野海岸

( 戦隊長 吉村 勝也大尉 )  
( 舟艇数・隊員は他の半分 )  
特設第五二戦隊 福岡県糸島郡深江村・福谷村福吉海岸  
( 戦隊長 川崎 又八中尉 )

第三六戦隊  
鹿児島県川内及び薩摩郡桶脇町市日野海岸  
( 暁第一九八五〇部隊 戦隊長 田村 一大尉 )

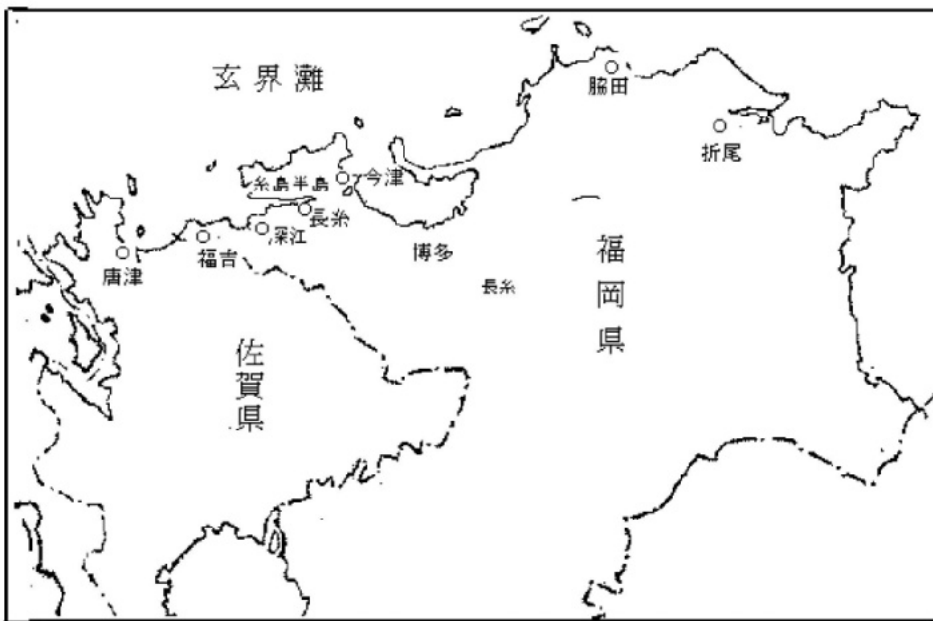
( 舟艇数 隊員同右 )  
第三八戦隊 佐賀県唐津、東松浦郡添村松浦海岸  
( 暁第一九八五三部隊 戦隊長 山下 作男大尉 )

第三七戦隊  
宮崎県日南市北郷及び南郷町海岸  
( 暁第一九八四七部隊 戦隊長 速見 綱一大尉 )

また、これらと離れた配備に  
第三九戦隊 高知県土佐久礼町、  
矢井賀及び上之加江海岸  
( 暁第一九八五四部隊 戦隊長 中島 幸男大尉 )

第三七戦隊  
熊本県天草上島楠浦及び天草下島海岸

中島 幸男大尉





があつた。

なお、これらの戦隊に協力する部隊としての基地隊は、当初の編成は約九〇〇名の大規模な大隊編成をとつたが、昭和二十年に入つての基地隊は、小規模な中隊程度の人員編成をとり、一五〇ないし二五〇名であり、主として舟艇の整備を中心とする作業隊であつた。

## 二、船舶特幹隊と海上挺進隊

船舶特幹は第四期生（昭和二十年六月入隊）を除けば、その最も多くが海上挺進隊に配備された。

しかし、このことから却つて船舶特幹



隊とは、このような水上特攻の要員養成を目的として採用されたものであつたといわれたりするとところである。

だが、時間的経過をみてゆくと、船舶特幹の募集は、昭和十八年に始まり、その要綱に書かれてあつたように、文字通り下級幹部（下士官）を速成するためのものであつた。

第一期生の入隊したのは昭和十九年四月十日であつたが、募集当時はまだその（海上挺進隊の）着想もなかつた。（海上挺進隊は四月末に着想され、五月に舟艇（①艇）の試作が始められている。）

又、第一次の海上挺進隊の編成が始まっ

たのは、昭和十九年八月初めである。

（第一戦隊〜第三十戦隊）

従つて二期生以後に入隊した第二、第三、第四期生の採用に当たつては、①要員としての目的が若干あつたと思われる。

第一次（第一戦隊〜第三十戦隊）の訓練及び出陣が終了した後、この戦隊の行なう戦法からみて、一度米軍側にこの戦法が知られてしまつては、対抗手段が取られるのは必定で（後にこの予測のように、沖繩ではこの対抗方法が講じられ、しかも最も簡単な方法としては、防材を船艇の周辺に浮遊させておくだけで足りたのである）この戦闘方法による攻撃は、もはや効果を期待できないという意見が起つてきたことから、これ以上の編成は打切るとの決定がなされ、舟艇の製造も要員の編成教育も中止の措置がとられることになつた。

しかし昭和二十年三月になると、主要都市も相次いで空襲を受け、更に硫黄島を失い、沖繩にも米軍の上陸が必至とみられるようになってくると、主要兵器である航空機の生産はその消耗に追いつけず、本土決戦を行なう方法として、早急にこの水上特攻方法に代りうる特攻戦術もないため、二十年四月から再び舟艇の製造、隊の編成（特幹一、二期生が主体）

が急がれるようになった。  
海上挺進隊の編制状況は次の通りである。

海上挺進隊隊長(全一般隊員)

約四、七〇〇名

第一〜第一九戦隊迄 全員特幹一期生

約一、六八〇名

第二〇〜第三〇戦隊迄

全員一般兵科からの下士官

約九五〇名

第二三戦隊特幹一期生

約三四名

第三一〜第五三戦隊迄

特幹二〜三 約二、〇〇〇名

(一部に特幹一期生及び少年戦車兵上がりの兵長が入っていた)

海上挺進隊一般隊員約四、七〇〇名

その内約三、七〇〇余の隊員(約七九%)

は、特幹の一、二、三期生で編成されていたのである。

(第二〇ないし第三〇の一〜コ戦隊は、

特幹以外の下士官を隊員とする隊で、そ

の一般隊員の数は約九五〇名(二一%)

であった)

従って海上挺進隊即ち船舶特幹といっ

ても、そう大差はないという事になろう。

(内訳数値には若干誤差がある)

(参考)

各挺進戦隊の総編成人員、

第一〜第三〇戦隊、

一戦隊約一〇四名

第三一戦隊〜五〇と五三戦隊、

一戦隊 九二名、

第五一と五二戦隊

一戦隊 五二名

(三一戦隊以降は戦隊長直接指揮 一般

隊員の中には 乙幹出身の兵長又は下士

官と特幹一期生のいるところもあった)

(参考) 特幹隊 卒業生

特幹一期生 一、八九〇名

特幹二期生 一、九〇〇名

特幹三期生 二、一六〇名

三次編成で幸ノ浦にて訓練中であつた

四一戦隊以降の特幹二、三期を主体とす

る戦隊の編成情況は次の通りである

(昭和二十年八月現在)

第四一戦隊 戦隊長 岡田 与平大尉

第四二戦隊 戦隊長 草深 圭二大尉

第四三戦隊 戦隊長 松本 初雄大尉

第四四戦隊 戦隊長 藤井 昌三大尉

第四五戦隊 戦隊長 中川 明大尉

第四六戦隊 戦隊長 丸山 正文大尉

第四七戦隊 戦隊長 丹羽 昭大尉

第四八戦隊 戦隊長 石川 巽大尉

第四九戦隊 戦隊長 清水 健大尉

第五〇戦隊 戦隊長 石塚 恒三大尉

第五三戦隊 戦隊長 津留 俊一中尉

他に、二期生、三期生混合の第一三教

育班(予備隊)があつた。

この第一三教育班は宮古島で海没し、幸ノ浦に戻って再編成中の、第三〇戦隊の本郷中尉が隊長を兼務していたので、本郷隊とも呼ばれていた。復員時の人員は本郷中尉以下の第三〇戦隊の十名と二期生及び三期生とで、約百八十名が在隊していた。

### 原爆救援について

幸ノ浦で演習中であつた四一戦隊以降の各戦隊員は昭和二十年八月六日広島市が受けた原子爆弾の被爆直後から救援に出動し、数日に亘って被爆者の救護、尸体処理等に携わつた。戦後、これらの作業に従事した多くの隊員は、残留放射能の影響で、甲状腺障害等の症状が亢進原爆症の認定を受けた。(完)

8月号でお知らせしたとおり中溝二郎様から頂きました陸軍海上挺進隊関連記事は今回で全ての記事の掲載を完了致しました。  
中溝様の御存命中に完了出来なかったのが残念です。  
在天の中溝様にお許しを願う次第です。  
改めて中溝様のご冥福をお祈り申し上げます。

金子 敬志

## 万朶隊隊員の遺稿・遺書

会員 大新田 納

陸軍で最初に編成された特別攻撃隊万朶隊は、昭和十九年十一月十二日、フィリピンのレイテ湾に初出撃し、田中逸夫曹長、園田芳己曹長（一番機）、久保昌昭軍曹（二番機）の三名が散華した。久保軍曹は私の伯父にあたる。因みに、四番機は「九回出撃九回生還」した佐々木友次伍長であった。

国のため、愛する者たちのために戦地に赴かんとした二十代の陸鷲達が綴った遺稿と遺書の文言は、親兄弟を氣遣う優しさに溢れている。望郷の念断ちがたく故郷の上空で惜別のバンクをしたその勇姿を思い描くとき、七十七年経った今でも涙を誘う。



田中逸夫曹長

（福岡京都市出身、大正七年二月二十四日生、満二十六歳）

「お父様 お母様

今日突然出征命令を受け、明日出発することになりました。また、第一線に帰ることになりました。このたびは決死隊ゆえもう皆様におあいできないと思いません。どうぞお身体を大切に、長生きして下さい。荷物は下宿の人にたのんで、あとから送ります。鞆の中に爪を残しておきます。爆弾飛行機ゆえ、身体は残りませんので。」（十月二十一日、茨城・鉾田）

「このたびは選ばれて特別任務のために行きますが、とうてい生きて帰ることはできません。出征する前に、もう一度おあいしたいと思いましたが、それもできません。この手紙を、おかあさんが読まれるころには、もう内地にはおりません。二十二日午後、飛行場（筆者註…海軍築城飛行場）の上を飛んで行ったなかに、自分がいたのです。おかあさんたちは見ていられたかどうかわかりませんが、私は、これが最後だと思って、じつと家を見てすぎました。なつかしいわが家。もうわが家に帰ることがないと思えば、胸にせまり、感無量でした。」

どうか皆様、元気で長生きをしてください。おとうさん、おかあさんも、寄る年

ですから、無理をなさらないように。それから、近いうちに私の葬式があると思いますから、その準備をしてください。

あまり恥ずかしいことのないように、親類のかたにもよろしくいっておいください。」（十月二十五日、台湾・嘉義）久保昌昭軍曹

（大分県中津市出身、大正十三年十一月一日生、満二十歳、少飛第十期）

「先日の夕方、中津上空を飛行致しました。金手のお宮や耶馬溪鉄道の古城駅などを見て感無量でした。今日海を越えて〇〇へ行きます。これにて内地ともお別れです。」（十月二十三日、福岡・雁ノ巣）



予テ身命ヲ大君ニ捧ケルハ曰木臣民タシ  
 高松ノ大道ナリト信ズ  
 ヤバ君ニ忠ニバ親ニ孝ナルノ道ニ成ス萬  
 シ山ヲモ高シテ海ヲモ深ナルヲ思フ  
 ノ思ハシ萬分ノ一ナリトモ報イ奉ル信  
 ナリ  
 猶小生ハ墓ハ不用ナリ碧空ニ白カム  
 見シバ小生ノ墓ナリト思ヒアサレヌ弟  
 戸主ト致シ弟妹ヲ是非辨メテ教育ス  
 受テテナレシコトヲ知ニテ願ヒ教ハス弟

御両親様へ  
 先立ツ子ノ罰・御許ヲ乞フ。而シ帝國  
 軍人ノ親タル者誰シモ今日在ルヲ覺悟スベキ  
 事ナリト想フ  
 予ニ聰明ナル御両親ニハ既ニ充分覺悟致セシ  
 事ト社家致ス父弟ナリ  
 而シ男子ノ兄弟中ニ三男十郎ハ生後同モ  
 無ク死モシテ次男千年モ二十才ニ至リ  
 今又昌昭ノ戦死ニ同ヒ御両親ノ心中如バウリ  
 ト拝察シ餘あるモノナリ  
 且ニ二十幾年酷暑モ嚴寒昌昭ノ御苦勞  
 ヲ御苦勞ト致シ今日マア過今ノ教育ニアツテ是  
 ニ致スア厚ク御禮申ヒテマシ

遺書

「御両親様へ」

先立つ子の罰、御許を乞う。而し帝國軍人の親たる者誰しも今日在るを覺悟すべき事なりと想う。事に聰明なる御両親には、既に充分覺悟致せし事と推察致す次第なり。

而し男子の兄弟中に三男十郎は生後間も無く死亡し、また次男千年も十三歳の春逝かれ、今また昌昭の戦死に向かい、御両親の心中いかばかりかと推察し餘あるものなり。

且、二十幾年間酷暑も嚴寒、昌昭の御苦勞を常と致さし、今日まで過分の教育にあずかり此処に改めて厚く御礼申し上げます。

而して、身命を大君に捧げるは日本臣民たる者の当然の大道なりと信ずされば君に忠なれば親に孝なるの道義に邁進し、山よりも高にして海よりも深なる主君、父母の恩に対し、萬分の一なりとも報い奉る覺悟なり。猶、小生の墓は不要なり。碧空に白雲浮を見れば小生の墓なりと思ひ下され。また、弟広を戸主と致し弟妹を是非将来中等教育以上を受けさせられんことを、切にお願い致す次第なり。」

情報提供のお願い (特別攻撃隊春日隊 隊員について)

事務局

表記について部外から写真等を頂き、隊員名が判らないかと問い合わせがありました。写真には説明等が無く、残念ですが、事務局では判明しませんでした。

お判りの方がおられましたら事務局までお知らせ頂ければ幸いです。

〒102-00072

千代田区飯田橋一丁目5-7 東專堂ビル2階

(公財) 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

電話 03-5213-4594

FAX 03-5213-4596

E-mail jimukyoku@tokkotai.or.jp

春日隊隊員の階級、氏名、出身県は次の通りです。

- |   |     |    |    |     |
|---|-----|----|----|-----|
| 1 | 上飛曹 | 室町 | 正義 | 愛知  |
| 2 | 1飛曹 | 池口 | 勇  | 福岡  |
| 3 | 1飛曹 | 高橋 | 仁一 | 新潟  |
| 4 | 飛曹長 | 岩城 | 稔  | 愛媛  |
| 5 | 飛曹長 | 犬塚 | 教市 | 愛知  |
| 6 | 上飛曹 | 川崎 | 一美 | 茨城  |
| 7 | 2飛曹 | 黒木 | 親夫 | 鹿児島 |
| 8 | 2飛曹 | 富田 | 勝夫 | 神奈川 |

頂きました写真等です。

兵士名：第三神風特攻隊春日隊兵士（富田勝夫、池口勇、室町正義、岩城稔、高橋仁一、  
犬塚数市、川崎一美、黒木親夫）の内の一人と推測

本籍地：

所属部隊：第三神風特攻隊春日隊

戦没年月日：昭和19年11月27日

戦没地：フィリピン・レイテ島湾内（スリガオ海峡）

入手経緯：目黒区在住のケント・ギルバート氏の実家（ユタ州）の近隣住民ロブ・カールソン氏が屋根裏部屋で父親の遺品の中から見つけた。カールソン氏の父親は元米兵で昭和19年11月27日、レイテ島のスリガオ海峡で USS セントルイス（軽巡洋艦）に乗船していた際に、特攻隊の攻撃を受けた。写真等はその時に入手したものと思われるが、詳細は不明。







## 顕彰譜 (4)

会報134号から始めた特別攻撃隊全史第二版の顕彰譜のご紹介第四回です。

海軍航空  
宮崎特攻基地の碑  
鎮魂之碑



## 由来記

宮崎海軍航空隊は昭和18年12月陸攻機練習部隊として開隊したが、昭和19年8月宮城県松島基地に移り、その後この基地は陸海軍の作戦基地として重要な役割を果たした。

昭和20年3月21日菊水部隊銀河隊の一部がこの基地より出撃し、九州南東海面の米機動部隊に特攻攻撃を取行したのを皮切りに、3月27日第一銀河隊、3月27日および29日に第二菊水彗星隊、4月2日第二銀河隊、4月3日第三銀河隊、4月7日第四銀河隊及び第三御盾七〇六部隊（銀河）、4月11日第五銀河隊、4月16日第六銀河隊、5月11日第九銀河隊、5月25日第一〇銀河隊が続々と沖縄周辺および喜界島南方の米艦船部隊に突入していった。総計55機一五二名である。

昭和58年基地生存者・遺族・県内関係32団体の協賛により慰霊碑建設期成同盟会（会長増田吉郎氏）が結成され、特攻隊員をはじめとする戦没者、空襲犠牲者、航空大学校殉職者の慰霊と基地史実の伝承を祈念して現宮崎空港外側（基地跡地）にこの碑を建立し、その左側に観音堂を安置した。慰霊祭は毎年4月の第一日曜日を基準にとり行われている。

所在地 宮崎県宮崎市赤江 宮崎空港脇

建立 昭和58年1月13日

問合せ先 宮崎市大字恒久五七九九

宮崎県特攻基地慰霊碑奉賛会

宮崎市橋通西一―一―一

宮崎市福祉部福祉総務課

（〇九八五―二一―一七五四）



海軍航空

# 出水特攻基地の碑 雲こそわが墓標之碑



## 由来記

出水海軍航空隊は、昭和18年4月陸上機練習部隊として開隊したが、昭和20年3月光州空に移転後は作戦基地となり、銀河、紫電、雷電が進出した。

3月中旬米機動部隊が九州南東海面に襲来するや菊水部隊銀河隊が編成され、3月19日銀河特攻隊がこの基地から出撃した。さらに4月16日には第二銀河隊(4機)、4月17日には第八銀河隊(1機)がこの基地から出撃し、米機動部隊に特攻々撃を敢行している。

戦後15年、昭和35年4月に出水特攻碑顕彰会(会長溝上巖氏)が地元有志により結成され、特攻隊員慰霊顕彰の祈りを込めて「雲こそわが墓標」の碑を、緑深いかつての戦闘指揮所壕上に建立し、毎年4月16日に慰霊祭を行っている。

**所在地** 鹿児島県出水市平和町

特攻碑公園(出水分跡)

**建立** 昭和35年4月16日

**問合せ先** 出水市平和町

出水市特攻碑顕彰会

(〇九九六一六三一二二四〇)

連載山ある記16

群馬県「赤城山」

会員 池田 康博

令和2年10月26日、「錦秋を楽しもう」と赤城山へ行った。赤城山と言っても最高峰の黒檜山ではなく、長七郎山と地蔵岳である。黒檜山には既に2回登っているが、以前、緑濃い時期に山麓の森を歩いたことのある長七郎山と、その隣の赤城山第3の高峰で未だ登ったことのない地蔵岳を、覚満淵経由で登ったら紅葉と新鮮な登山気分の両方が味わえるのではないかと思った。

赤城大洞駐車場を10時20分に出発。ここは大沼湖畔で標高は千三百mを超えている。車道を赤城公園ビジターセンターの方へ15分ほど歩くと、「覚満淵」の入口に着く。覚満淵は、小さな尾瀬とも言



われる湿原で、周囲八百mほどの沼である。やや過ぎた感のある紅葉を眺めながら、半周ほどすると鳥居峠への分岐があるのので、ここで沼を後にして峠に向かう。10時45分に標



高千三百九十mの鳥居峠に到着。ここには嘗て地上ケーブルカーの終着駅があった。長七郎山への登山口もここにあるが、手前に小地藏岳があるため、この山の斜面を回り込むように登って行き、小沼と長七郎山との分岐点まで来たら左に折れ、小地藏岳への分岐から稜線を更に登って行くと11時30分、広々とした頂上に着いた。標高は千五百七十九m、桐生方面、そして関東平野が開けて見える。小休止の後、登ってきた道とは反対側に下って小沼を目指す。小沼は、長七郎山の火山活動で出来た標高千四百七十mの火山湖で周囲は1キロ程ある。急な傾斜を下って小沼まで降りると、ここからは湖畔の景色を堪能しながら、3分の1周ほどゆっくり歩いて車道に出た。車道を少し上ると、そこが八丁峠で、標高は千四百九十m、地蔵岳の登山口である。12時6分に登山口を出発。人氣の山らしく、地蔵岳の登山道はよく整備されていて、スタンプ地点から木製の階段が続く。登山道の半分以

上はこの階段は道なかるうか。お陰で快調に歩を進め、12時35分山頂へ到着した。山頂へは、NHKは広く、



他各局の塔も立っていて興を削ぐが、黒檜山や大沼、そして、ここまで歩いてきた覚満淵から小地藏岳、長七郎山、小沼が眼下に望めて素晴らしい。ここでゆっくり昼食を摂り下山開始。八丁峠まで下り、ここからは赤城山第一スキー場に沿って、林と熊笹の中を一直線に下り、大洞駐車場に着いたのは14時10分だった。この日は高齢の登山者が多かった。か言う私もその一人であるが、軽度の山歩きで、眺望が良く変化もあり、ほど良い山歩きだと感じた。

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部



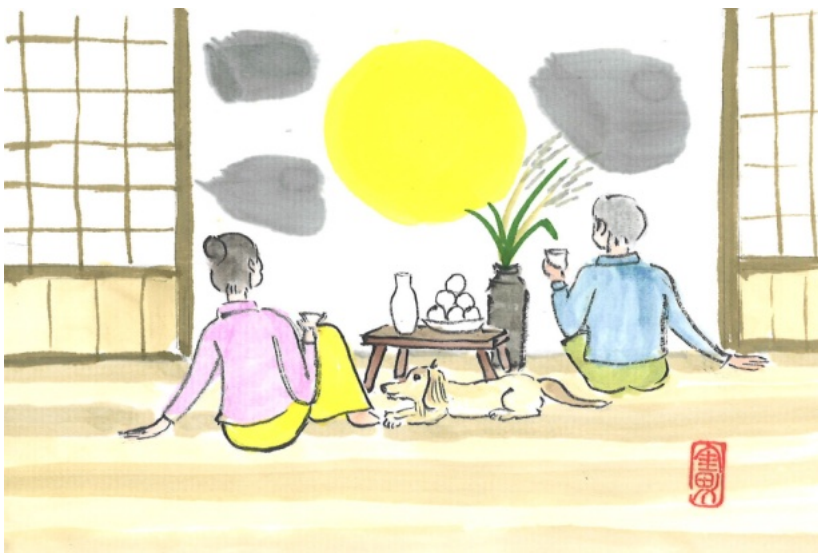
● 行きますと 笑顔残せし 征く君の  
背なのぬくもり 今も忘れじ

淳

● かの君に 想いめぐらす 秋の宵

淳子

● 顔上げた 空の高さに 秋を知る  
よみびとしらず



● 宝くじ 抽選までの 夢を買う

● 備忘録 置き場所忘れ 役立たず

ネコ

事務局からの報告等

一 住所等の変更について

現在、会報は、メール便にて皆様にお届けしています。メール便は、あて先が少し違っただけでも事務局に返送され、お届けすることが出来ません。

実は、毎号、十数通が「宛先不明」で返送されており、郵便局から再度発送の事務を行っております。

転居又は地番等が変わった場合には新しい住所名を、また、同居されるようになった場合は、「〇〇様方」まで必要となりますので、電話やメール、FAXなど、事務局にご連絡下さいますようお願い致します。

二 年会費及び寄付金の税額控除

当顕彰会は公益財団法人として認定されていますので、年会費も税制上は「寄付金」となります。このため、年会費を確定申告する事により税額控除を受けることが出来ます。

確定申告に必要な「寄付金受領証」と「税額控除に係る証明書㊟」が必要な方は遠慮なく事務局へご連絡下さい。なお、年会費も含めて一万円以上の御寄付をされた方には、ご連絡の有無に関係なく十二月月上旬に送付しています。税額控除についてご不明の方は事務局にお問合せ下さい。

寄付者御芳名(敬称略)

(令和3年7月1日～9月30日)

(単位千円)

一〇〇	吳 奈々子	二〇	遠山三千代	三	橘 正幸	三	伊藤 公一
一四	氏家 康宇	二三	松澤 建	三	安田 和義	三	清水 典郎
一二	萩原 健一	一二	降矢 達男	三	池田 康博	三	下森 康玄
一二	秋元 光広	一〇	宮倉 崇	三	早川 文象	三	館本 勳武
一〇	福田 文治	一〇	粕井 隆	三	松田 栄	三	松岡 廣城
一〇	山下 通利	一〇	紺野 真理	三	野々田洋介	三	佐藤 三恵
一〇	上野むつ子	一〇	浮世 喜昭	三	山本 亘	三	藤本 英憲
一〇	吉田 三郎	一〇	廣川 恭子	三	中村 実	二	小泉 朋美
一〇	田 中 襲	七	井川 嘉江	二	近藤 敬子	二	柄澤 寛之
七	川田久四郎	七	白田 智子	二	新井 重雄	二	阿部 敏行
七	辻 外文	七	藤元 正明	二	吉田 治正	二	大川 吉昭
七	吉村 伊平	七	呉 正男	二	川井 孝輔	二	木村 太郎
七	田辺さだ子	七	中村 真	二	長本 幹郎	二	今井 敏
七	山根 秋男	七	塚田 征二	二	大林 喜一	二	吉野 信二
七	加藤 拓	七	橋本大二郎	二	深山 明敏	二	伴野 富夫
七	(株)エアースタジオ	七	大澤 和久	二	岩崎 茂	二	大瀧 成紀
七	天野 弘子	七	武安 俊隆	二	村川 豊	二	鳥海 周一
七	神林 千祥	七	今泉 幸男	二	武藤 一彦	二	堀 百夏
七	花輪 悦子	七	堂坂 清	二	白井日出男	二	池田 守
七	服部 武志	六	林 佐吉	二	橋本 亀	二	佐藤 義信
五	中溝 二郎	五	前田 俊郎	二	島崎 宗勝	二	中島 尚史
五	織田 祐輔	五	市川 雄一	二	原田里津子	二	伊藤 元夫
五	相山 正人	四	長谷川知幸	二	桜井 實	二	若月 良介
四	和才 誠	四	島田 正登	二	安藤佐智子	二	高橋 芳幸
四	島袋 幸雅	四	沖 周治	二	平川 善人	二	山本 寛
四	根本 紘一	四	千鳥が淵墓苑奉仕会	二	馬場しづ子	二	安岡 賢治
四	(公財)千鳥が淵墓苑奉仕会	四	辻本 浩司	二	戸祭 真生	二	島野 雅子
四	山下 拓真	四		二	田中 臣二	一	滝波 登

菅原 道之	加藤 千佳
大手 良之	佐多 和仁
青木 義博	天野 文恵
渡辺 由佳	渡辺 里佳
原田 茂	松本 賢二
早坂 正子	森 實
吉田 紀	古川 淳一
宇都宮秀全	山口 明
小森 正明	福島 隆夫

新入会員名簿(敬称略)  
(令和3年7月1日～9月30日)

埼玉 今長 信浩	神奈川 大新田 納
東京 石井 輝久	兵庫 得能 弘一
金古 真一	長崎 北村 芳正
沖縄 横山 モナ	山中 進
北海道 駒場 剛太郎	千葉 鍋谷 欣市(3・7・5)
杉原 清之(2)	東京 橋本 正雄(3・6・13)
吉池 庄三(3・9・17)	埼玉 武藤 良介
山口 山根 秋男(3・5・23)	山崎 下森 康玄(3・5)

ご冥福をお祈りします。

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰(他団体への参加を含む)
- ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

○ URL: <https://tokkotai.or.jp>

QRコード



ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。PDFファイルは編集の都合上、お受けできません。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
- 3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。が必要な場合はその旨お書き添え下さい。
- 5 会報・機関紙、投稿記事等の送付先は左記宛として下さい。  
〒102-0072  
東京都千代田区飯田橋一丁目5-7  
東専堂ビル2階  
公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会  
電話 03-52213-4594  
FAX 03-52213-4596  
E-mail [jimukyoku@tokkotai.or.jp](mailto:jimukyoku@tokkotai.or.jp)